

JICA国際協力中学生・高校生 エッセイコンテスト2024 優秀作品集



言葉にすれば、
世界を動かす力になる。

写真提供(社)日本写真協会会員 篠原誠三

テーマ

未来の地球のために ～ 私たちにできること～

はじめに

独立行政法人国際協力機構（JICA）理事長 **田中 明彦**



「JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト」は、中高生の皆さんに、開発途上国の現状や日本との関係について理解を深め、国際社会の中で日本、そして一人一人がどのように行動するべきかを考えていただく機会を提供することを目的としています。今年度で中学生の部は29回目、高校生の部は63回目を迎え、中学生の部で16,526点、高校生の部で19,676点、合計36,202点の作品が国内外より寄せられました。

2024年度のテーマは、「未来の地球のために～私たちにできること～」でした。入賞作品では、食品ロスやプラスチックごみなど、身近な国際理解について述べる作品や、学校で学んだSDGsについてさらに深く考える作品が多かったように思います。また、日本国内の課題解決につなげて考える作品などもあり、皆さんの熱い思いが伝わってきました。

さて、これからの日本、また世界で活躍する皆さんには、国際社会と日本のつながりについて、二つの側面に関心を持っていただきたいと思います。

一つは、「地球規模で起きている課題」です。例えば、気候変動によって多くの農作物が影響を受け、輸入するカカオやコーヒー豆の価格が上がったり、遠くの国から流れてきたプラスチックごみが日本の海岸に漂着することがあります。気候変動だけでなく、紛争や感染症の流行など世界にはさまざまな課題があり、国境を越えて地球全体に広がり、日本に暮らす私たちもその影響を身近に感じます。そして経済的に弱い国々、そこで暮らす脆弱な立場にある人々は特に強い影響を受けています。

SDGsの達成目標年である2030年まであと5年となりました。世界各地で発生している災害、今なお続く紛争等の影響もあって、SDGsの達成状況は必ずしも順調ではありません。皆さんは、身の回りのことから世界のことまでSDGs達成につながる取り組みについて高い関心をもっておられると思いますが、JICAもSDGsの達成に貢献する事業をますます進めていかなくてはならないと思っています。

もう一つは、「多文化共生」です。現在、日本で暮らす外国人の数は360万人にもものぼります。学校にも、いろいろな国から来た友達が増えているでしょう。これからの日本は、より多様な国籍、宗教、価値観を持つ人々が暮らす国になっていくことが予想されます。グローバルな世界で「共に生きる」ために、いろいろな価値観を持った人とお互いに認め合い、日本人も外国人も安心して仲良く暮らせる共生社会が、多文化共生社会です。

JICAも多文化共生社会の実現のために、国内外のネットワークを活かして、学校現場や地域社会に協力しています。例えば、途上国で活躍した海外協力隊員の中には、帰国後に外国籍の生徒が多く通う学校で、学習支援をされている方がおられます。

皆さんにはこれからも、日本のこと、そして日本にしながら世界のこと、その両方を「自分ごと」としてとらえる発想、姿勢を持ち続けてほしいと思います。

最後に、応募された生徒の皆さん、本コンテストを活用いただきました教員の皆様、また、長年本コンテストに後援・協賛をいただいている各団体・企業、審査員の皆様、本コンテストにご協力くださいました全ての関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

2025年3月

目次

はじめに	独立行政法人国際協力機構（JICA）理事長 田中 明彦	
目次	01
審査講評	中学生の部 審査員長 尾木 直樹氏（教育評論家／法政大学名誉教授／東京都立図書館名誉館長）	02
	高校生の部 審査員長 星野 知子氏（俳優／エッセイスト）	02
受賞の言葉	学校法人明治学園明治学園中学校 3年 ファウラー 姫瑠	03
	愛媛大学附属高等学校 3年 飯田 夕和	03

中学生の部 上位入賞者作品

最優秀賞

独立行政法人

国際協力機構理事長賞	ファウラー 姫瑠	学校法人明治学園明治学園中学校 3年	行動を起こす	04
------------	----------	--------------------	--------	----

外務大臣賞

	飯田 理人	大阪市立北稜中学校 3年	「Base Hope」	04
--	-------	--------------	-------------	----

文部科学大臣賞

優秀賞	南 優歌	泰阜村立泰阜中学校 2年	大人になる前にできること	05
-----	------	--------------	--------------	----

	須永 光玲	三重大学教育学部附属中学校 1年	ウミガメに会うために	05
--	-------	------------------	------------	----

	石山 文香	松蔭中学校 1年	私の貢献できる未来 ～誰一人、絶対に取り残さない～	06
--	-------	----------	---------------------------	----

	具志堅 駿太郎	昭和薬科大学附属中学校 1年	SDGsと高齢者福祉について	06
--	---------	----------------	----------------	----

審査員特別賞	三本松 采花	須賀川市立第三中学校 1年	私達の未来を救うために	07
--------	--------	---------------	-------------	----

	高木 七生	横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校附属中学校 1年	植物発電で世界を救う	07
--	-------	-------------------------------	------------	----

	森岡 玲圭	ノートルダム清心学園清心中学校 3年	変人の使命	08
--	-------	--------------------	-------	----

	吉村 心結	周南市立富田中学校 2年	海洋ごみで何かできるのか	08
--	-------	--------------	--------------	----

国際協力特別賞	鈴木 慶雅	山形大学附属中学校 3年	同じ地球に暮らす仲間として	09
---------	-------	--------------	---------------	----

	柳澤 怜央	ぐんま国際アカデミー中等部 3年	未来の地球のための意識改革	09
--	-------	------------------	---------------	----

	長田 楓	さいたま市立浦和中学校 3年	他人事と思わず	10
--	------	----------------	---------	----

	白石 陽向	上尾市立上尾中学校 3年	言葉	10
--	-------	--------------	----	----

	丸田 恋夢	糸魚川市立能生中学校 3年	「自分事、として」	11
--	-------	---------------	-----------	----

	栗田 いろは	泰阜村立泰阜中学校 2年	「命」～共生するということ～	11
--	--------	--------------	----------------	----

	浅野 匠	学校法人滝学園滝中学校 1年	「知識」から「行動」へ	12
--	------	----------------	-------------	----

	足立 健人	学校法人名古屋学院名古屋中学校 3年	「身近に感じること」	12
--	-------	--------------------	------------	----

	倉地 咲之介	大阪教育大学附属池田中学校 2年	小さな取り組み	13
--	--------	------------------	---------	----

	アルハム ジュルカルナイン	奈良教育大学附属中学校 3年	Peace Starts at Home:The Role of Family in World Harmony	13
--	---------------	----------------	--	----

高校生の部 上位入賞者作品

最優秀賞

独立行政法人

国際協力機構理事長賞	飯田 夕和	愛媛大学附属高等学校 3年	「教育は鍵である」	14
------------	-------	---------------	-----------	----

外務大臣賞

	中川 心之介	東京学芸大学附属国際中等教育学校 5年	「新たな付加価値から切り開くフェアトレードの未来」	14
--	--------	---------------------	---------------------------	----

文部科学大臣賞	渡會 愛香	山形県立米沢興譲館高等学校 1年	寄付は寄付だけではない	15
---------	-------	------------------	-------------	----

優秀賞	綾部 真宙	さいたま市立大宮国際中等教育学校 3年	「パートナーシップ」で、世界は変わる。	15
-----	-------	---------------------	---------------------	----

	金指 沙絵	横浜共立学園高等学校 2年	自作の絵本で伝える児童労働	16
--	-------	---------------	---------------	----

	中村 嶺治	金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校 1年	「未来の海を守るために」	16
--	-------	---------------------------	--------------	----

審査員特別賞	花田 稟果	仙台育英学園高等学校 1年	幸せな生活とは	17
--------	-------	---------------	---------	----

	井上 美奈	東京都立科学技術高等学校 1年	人のつながりと平和と技術	17
--	-------	-----------------	--------------	----

	奈良 百華	奈良県立大学附属高等学校 1年	机で繋がる地域と林業	18
--	-------	-----------------	------------	----

	初田 心和	鹿児島県立鶴丸高等学校 3年	「知りたい」のその先に	18
--	-------	----------------	-------------	----

国際協力特別賞	高橋 桃奈	独立行政法人国立高等専門学校機構仙台高等専門学校 2年	「生きるための選択と教育の意味」	19
---------	-------	-----------------------------	------------------	----

	稲森 優衣	横浜共立学園高等学校 1年	「幸せの連鎖」をつなぐ献金	19
--	-------	---------------	---------------	----

	須貝 陽香	新潟県立新潟高等学校 2年	少しの当たり前を変えること	20
--	-------	---------------	---------------	----

	西田 朱里	愛知県立千種高等学校 1年	アイスコーヒーとコンポストとより良い未来	20
--	-------	---------------	----------------------	----

	新井 裕子	学校法人創価学園関西創価高等学校 2年	世界市民の自覚	21
--	-------	---------------------	---------	----

	徳山 颯介	大阪府立豊中高等学校 1年	平等から公平・公正へ	21
--	-------	---------------	------------	----

	谷田 花奈	鳥取県立米子東高等学校 3年	動け、非力な私たち	22
--	-------	----------------	-----------	----

	中村 慧美	西南学院高等学校 1年	それ、本当にいる？	22
--	-------	-------------	-----------	----

	國永 理緒	福岡県立修猷館高等学校 2年	私たちの地球を変えるには	23
--	-------	----------------	--------------	----

	野口 雛愛	昭和薬科大学附属高等学校 1年	継続は力なり	23
--	-------	-----------------	--------	----

表彰式				24
-----	--	--	--	----

学校での取り組みの紹介				26
-------------	--	--	--	----

海外研修				28
------	--	--	--	----

審査員一覧／応募総数／入賞者一覧／特別学校賞一覧／学校賞一覧				31
--------------------------------	--	--	--	----

国際理解教育／開発教育のためのJICAのプログラム案内				34
-----------------------------	--	--	--	----

審査講評

中学生の部

審査員長

尾木 直樹 氏

教育評論家
法政大学名誉教授
東京都立図書館名誉館長



今年度は「未来の地球のために～私たちにできること～」というテーマを、自分の身近な日常生活に引き寄せて、できることから取り組みを始めようとする、堅実ですが力強さも感じる作品が多く目に付きました。

食品ロスの問題に注目したJICA理事長賞のフラワー姫瑠さんは、家の冷蔵庫内の全ての食品の消費期限、賞味期限を確認し、期限の近いものを書き出して貼り付け、家庭内での食品ロスを減らすという実践を行います。さらに、その結果を記録し、分析することで、問題解決に必要なことは何かという本質に気づくのです。

文部科学大臣賞の南優歌さんは、マイクロプラスチックの海洋流出問題を解決するため、まずは優歌さんのおばあちゃんに、発泡スチロールの箱を植木鉢の代わりにして使わないよう、この問題に関連する書籍などを用いて説得を試みました。

外務大臣賞の飯田理人さんは、ベトナムの貧困問題を考える中で、自身の好きな野球と結び付け、不要になったグローブを使ったユニークなアイデアを提案してくれました。

このように、大きな社会課題に対して自分ができることから行動を始めることで、皆さんの中に少しずつ自信が芽生え、成長をしていく様子が文章全体から伝わり非常に頼もしく思いました。

皆さんは小学生の頃から、SDGsについて各教科や総合学習を通して学ぶ機会を持っています。学びのスタイルも昔のように知識をインプットし、いかに正確にアウトプットするかという形式ではなく、自分の興味・関心を「探求」し、一人ではなく友達と協同しながら課題を掘り下げています。だからこそ、環境問題などをより身近に捉え、日常生活に落とし込んで行動に移すことができるのだと思います。エッセイ執筆を通して着実に一步を踏み出した皆さんが、これから益々問題意識を深めてくれることを期待しています。

高校生の部

審査員長

星野 知子 氏

俳優／エッセイスト



受賞者のみなさん、おめでとうございます。
不安定な世界情勢や格差の問題を肌で感じているエッセイが多く、実際の活動も踏み込んで行っている人が多かったように思います。

理事長賞の飯田夕和さんは「教育」に的をしばっています。エッセイの構成がきちんとしていて、自分でやるべきことを決め着実に進んでいます。その行動力とアイデアは、将来への可能性を感じます。誠実な人柄がにじみ出ています。

外務大臣賞の中川心之介さんはフェアトレードという、これからもっと浸透してほしいことに取り組んでいます。日本の高校生が企業と対等に話し合える時代が来ていることは心強いです。ビジネス

としての利益も考え、今後、事業として成り立っていくのが楽しみです。

文部科学大臣賞の渡會愛香さんは、同じシングルマザーの家庭という共通点でケニアの親子に支援を始めます。「互いに理解し合い、心を寄せ合うこと」。寄付を通じて実感できたのは自分の喜びでした。あたたかい気持ちが伝わってきました。

国際交流は、自分ひとりではできません。人と関わることで進み、成り立ち、心が通じ合います。それは素晴らしいことです。一方、エッセイはひとりだけの作業です。活動して人々とふれあったあと、その記憶と考えを文章にするときは、自分だけのことばで表現していきます。エッセイを書くことによって行動を整理し、自分を見つめます。とても大切なことです。

みなさんのエッセイはコンテストの記録に残る優れたものです。でも、それだけではありません。あと10年、20年経ってあらためて読んでみてください。あなたがどれだけ真摯に高校時代の日々を送っていたかよみがえってきます。これから先、迷ったり挫折したりすることもあるでしょう。このエッセイはきっと宝物になっているはずです。

受賞の言葉

中学生の部

学校法人明治学園明治学園中学校 3年

ファウラー 姫瑠

初めに、JICAのエッセイコンテストを通じて、地球が抱えている課題や自分達にできることについて考えるきっかけを得られたこと、そして、独立行政法人国際協力機構理事長賞という大変光栄な賞を頂けたことへの感謝を申し上げたいです。

エッセイを書く前、昨年度の優秀作品を読ませて頂いたところ、地球に暮らす人々皆のことを真剣に考え、自分にできることをしっかりと行動に移していることが伝わり、尊敬に値する作品ばかりでした。

今年度のテーマは、「未来の地球のために～私たちにできること～」。壮大なテーマを前にし、何を書けば良いか、私はなかなか思い付きませんでした。SDGsの目標をはじめ、地球上にはたくさんの課題があることは知っていましたが、それを解決す

るために何か特別なことをしている訳ではない。未来の地球のためにできることって何だろう。そう考えているうちに、あることに気づきました。

それは、現在の世界が抱える問題を、他人事のように捉えている自分です。

地球の課題は私達一人一人が考えていかなければならない、頭ではそう分かっている、心のどこかに、地球の課題はどこか遠いところで起こっていること、それを解決するのは私とは違って特別な人だという考えが存在しました。

そのことに気づいた時、地球が抱える最も深刻な課題は、私達人間の多くが社会の課題を自分のこととして捉えることができていないことだと思いました。

未来の地球のために自分にできること、それがどんなに小さなことでも、やってみること。そして、地球の問題と自分の行動は深く関係しているという実感を持つこと。

私は、エッセイを書くことを通して、その2つのことが課題を解決する上で一番大切だと気が付きました。

私を含め、世界中の人々が、地球の課題を自分事と捉え、足りない部分を補い合う世界にすることを目標として、努力していきたいと思っています。

高校生の部

愛媛大学附属高等学校 3年

飯田 夕和

この度は、名誉ある賞を頂き誠にありがとうございます。私の想いが届いたこと、大変嬉しく思います。

私は高校2年生の時、アフリカのモザンビークに渡航しました。様々な社会問題を目の当たりにし、それらを解決するためには教育が「鍵」であると実感しました。それと同時に、現地の方々の心の幸福度の高さに衝撃を受け、小さな幸せに感謝することの大切さを実感しました。生きていること、毎日ご飯が食べられていること、教育を受けられていること…。何一つとして当たり前のことではないと改めて気づくことができました。

そして、エッセイに書いた活動、込めた想いの裏には、沢山の方の支えがありました。私にきっかけや出会いを与えてくださった尊敬する方々。私の活動を理解し、応援してくださった方々や教育関係者の皆様。ありのままを受け入れ合い、笑い合い、切

磋琢磨できる同じ志を持った心強い仲間たち。私に生きる希望を与えてくれた大切な人。どんな時も味方でいてくれ、背中を押してくれた家族。色々な人と経験や感情を共有し自分自身と向き合うことで、成長することができました。全ての出逢いに、支えに、感謝しています。

未来の地球のために私たちにできることは、「ありがとう」の感謝の気持ちを持って、愛を持って人に接することだと思っています。自分を大切にすること、自分を大切に想ってくれる人を大切にすること。そんな小さいように見えて大きな一歩が、心の平和を世界中に広げていくための一歩になると信じています。私には、「教育によって子どもたちの可能性を広げる」という夢があります。そのために、世界の人々と相互理解を深め、信頼関係を築き、協働して課題解決できる人になりたいです。

私は、これからも感謝の気持ちや楽しむ気持ちを大切に挑戦し続けます。そして、「今」を大切に生きていきたいと思っています。

世界中の子どもたちの教育機会が確保されますように

世界中に平和が訪れますように



行動を起こす

〔福岡県〕

学校法人明治学園明治学園中学校 3年 **ファウラー 姫瑠**

SDGsの目標十二「つくる責任、つかう責任」は、私達にとって非常に身近な課題であるとは私は考える。おそらく、消費期限、賞味期限を過ぎた食品や食べ残しなどを捨てた経験のある人が大半だと思うからだ。このような食品ロスは、私達一人一人が自分事と捉え、向き合っていかなければならない課題だと私は思う。

学校の授業で、目標十二について具体的な解決策を考える機会があったため、私はこの夏休みに、「冷蔵庫内のすべての食品の消費期限、賞味期限を確認し、期限が近いものを書き出して冷蔵庫に貼る」という取り組みの実施によって、家庭内での食品ロスの削減を図った。

実施前の一週間と実施後の一週間の食品廃棄量を計測したところ、実施前は合計約六〇〇グラムだったのに対し、実施後はゼロだった。これによって、私が行った取り組みは、効果的であると分かった。

この取り組みをやってみて、私が感じたことは二つある。

一つ目は、小さなことでも実行してみて、身近なところから改善していくことが重要だということだ。一週間での食品ロスが、実施後は実施前より六〇〇グラム近く減ったことから計算すると、一年間継続すれば約三〇キログラムの食品ロス削減ができるという結果となる。もし、この取り組みを社会全体に広められれば、かなりの量の食品ロスを減らし、環境への負荷や資源の無駄遣いを減らすことができる。簡単なことでも実行し、それを継

続して、周りに広めていくことで、世界の現状を改善していきたいと思った。

二つ目は、家庭内での食品ロス解決においても、「見える化」が大事であるということだ。消費期限、賞味期限を書き出すようになる以前は、消費期限、賞味期限切れが原因で捨てることになる食品が多くあったが、冷蔵庫の中の早く食べなければならない食品が一目で分かるようにすると、食品ロスが減り、「食べ物を捨てないようにしよう」と意識することも増えた。そのため、分かりやすく整理し、工夫を凝らすことが、課題を解決していく時に非常に大切だと気づいた。

私は、実際に行動を起こしたことで、SDGsの目標を、自分に深く関係していることだと捉え、意識しながら生活することができるようになった。世界が抱えている課題は、一人だけの力で解決することは決してできないので、一人一人が課題と向き合い、行動に変え、社会全体で取り組んでいくことが必要になる。だからこそ私は、積極的に問題を探して向き合い、周りに協力を求めることで、解決へ向けて努力していきたいと思う。



「Base Hope」

〔大阪府〕

大阪市立北稜中学校 3年 **飯田 理人**

僕の家は決してお金持ちではない。しかし、それでも僕は恵まれている、と言い切れるには理由がある。

それは14歳の春、「空飛ぶ車いす活動」でベトナムの都市ホーチミンを訪れた時のことだった。「貧困」という言葉の本当の意味を、僕は痛感した。「空飛ぶ車いす活動」というのは、日本で使われなくなった車いすを工業高校が分解・整備・再生し、アジア諸国で必要としている方へ届けるというボランティア活動だ。参加した動機は、毎日学校と野球の練習で疲れていたの、気分転換にという漠然としたものだった。

ホーチミンの中心部は、新しい建物が並んでおり、車やバイクが行き交うとても活気がある街だった。ところが、1つ裏通りに入ると、景色ガラッと変わった。古びた服を着た素足の子供や、白髪のお年寄りが地面に座っていた。道も舗装されておらず、歩きにくい。あまりの風景の落差に驚いていると、突然「マネー」と声をかけられた。振り返ると、まだ7歳ぐらいの女の子が、小さな赤ちゃんを抱きながら手を前にし、お金をねだってきたのだ。怖くて走り去ろうとした僕は、一瞬その子と目が合った。ひどく悲しく、やるせない気持ちになった。

ベトナムは経済発展の段階にあり、物価が高騰してきている。そのため、物価上昇についていけず、貧困状態に陥る人も多い。高収入を得ようにも、教育が不十分。学べる機会に恵まれたとしても、それを活かす産業がない。

あまりにも問題が大きすぎる。個人にできることなんてあるの

だろうか。野球しかやってこなかった僕にできることなんて、なおさら無いだろう。

野球？ そうだ。「空飛ぶ車いす活動」、あれを普段使っているグローブにも適用できないだろうか。もともとグローブは衝撃に強く、耐久性が高い。メンテナンスさえすればいつまでも使い続けることが可能だ。ものによっては1つ数万円以上する、高級品である。調べてみると、ベトナムでは2022年から野球選手権が開催されているらしい。野球というスポーツが、これから広がっていくと思う。

アイデアはこうだ。部活動で不要になったグローブの寄付を日本各地に呼びかける。修理は協力してくれる団体をお願いし、それらをベトナムに寄付する。ベトナムで役目を終えたグローブは、財布としてアップサイクルが可能だ。ひょっとすると靴も作れるかもしれない。僕が独自の革産業を発展させるための起点となり、その日暮らしの人々を少しでも笑顔にする未来があるのではないかと。

野球を通してベトナムと文化交流を行い、使った道具は廃棄するのではなく、産業として活用する。これで本当にベトナムの貧困問題が解決できるかといえば分からない。ただ、野球が盛りあがり、いつか日本とベトナムで試合が出来ると思うとわくわくする。そして、僕もいつか自分のグローブを財布にして、得たお金をあの時の女の子に渡したいと思う。



大人になる前にできること

〔長野県〕

泰阜村立泰阜中学校 2年 南 優歌

私はこの地球が、今よりもっとよくなってほしいと思います。しかし、どうやら地球は私の思いと逆の方向に進んでしまっているようです。これから生まれる命が快適に過ごせるようにするために、行動を起こすときが来ているようです。

みなさんご存じの通り、マイクロプラスチックとは紫外線や波によって五ミリメートル以下まで細くなったプラスチックのことを指します。マイクロプラスチックの海洋流出により、海の生態系に大きな影響を及ぼしてしまっており、環境や人体にも少なからず影響を与えてしまう可能性も十分にあります。決して私達に関係のないことではないのです。何とかしなくてはけません。

私がこう考えるようになったきっかけは、小学六年生の頃に環境活動家の露木志奈さんと会ったことです。露木さんは今の地球が「このままではもたない」と大学生で講演活動を始めました。そこで私は地球の現状について知りました。今まで気が付かなかった環境問題にも気付かされました。その時露木さんはまだ小学生だった私でもできることがあるということをとくさん教えてくれました。

私が露木志奈さんと会って感じたことは、行動を起こすのに早すぎることはないということです。露木さんは「大学は待ってくれるけど地球は待ってくれない」と休学をしてまで行動を起こしています。今目の前で壊れてゆく地球を前に、自分には何がで

きるのかを考えた結果だったのではないかと思います。

私も「自分には何ができるのか」を考えたとき、一番すぐでできると思ったのは、「身近なところから変えていく」ことです。そこで私は発泡スチロールに目をつけました。私の祖母は植物が好きで、たくさんの花を育てています。しかし、植木鉢のかわりとして発泡スチロール箱が使われていたのです。発泡スチロールは細かいプラスチックのつぶが集まってできています。少しでも衝撃を与えてしまうと欠けて粉々になり、マイクロプラスチックと化してしまうのです。風などで川や海に流されてしまえば大変です。そこで私は本などを用いて、祖母を説得することにしました。初めは理解ができずに面倒くさがっていたものの、最後には納得し、今後は使わないようにすると約束してくれました。とても身近なところで海洋プラスチックゴミを減らすことができました。

私の好きな言葉に、露木さんの「大人になるまで待たなくていい」があります。本当にその通りだなと思います。全てを変えられなくても、私のようにできることが身近にあるかもしれせん。子どもだからできないではなく、子どもでもできることを探して、地球をもっとより良くしていきたいと思います。小さな力でもそれが集まれば、世界を変えるほどの大きな力にすることができるのです。



ウミガメに会うために

〔三重県〕

三重大学教育学部附属中学校 1年 須永 光玲

「ウミガメの未来を必ず守るからね。」私はこう心の中でつぶやきながら、ゴミ袋に次々とゴミを集めていた。

私の住んでいる三重県は工業地帯が有名で、四日市コンビナートには、日本の大手企業がある。臨海部には石油化学コンビナート、そして内陸部には半導体メモリー工場、電気機械、食品など多くの会社があり、ものづくりがさかんだ。夜になると、煙突などがライトアップされ、工場夜景を楽しむことができる。また、鈴鹿市も自動車メーカーの工場があり、自動車部品をはじめとした製造業が多い。

このような工業地帯である三重県の海岸にはたくさんのゴミが流れついていた。そのせいで、ウミガメや魚の死がいや砂浜へあがり、体内からはプラスチックゴミが確認されたそうだ。それだけでなく、近年はウミガメの産卵も確認できなくなりつつあるのだ。このような状態では、これからも多くの魚が苦しみ、いつかウミガメはいなくなってしまうのかもしれない。

私は、日頃からSDGsに興味があり、SDGsで地球に貢献できると知り、出来ることから少しずつ取り組んでいた。しかし、海では、ポイ捨てされたペットボトルなどのプラスチックが流され、海洋プラスチックゴミとなり、海中に蓄積されているニュースをよく耳にするようになった。そして、SDGsについての本から世界のクリーンウォータースコアは高くなく、深刻な課題があることを知った。そこから、私も身近な場所から海をきれいにしたいと

思うようになった。

そんなある日、祖父母の家で広報を見つけた。なにげなく目を通していると、「吉崎海岸の早朝清掃・環境学習」という文字が飛びこんできた。そこには、海岸を保全するため、清掃と外来植物の駆除をし、その後海に関する楽しい勉強会を開き、と書かれていた。「これだ!」と私はひらめいた。そして、インターネットでもこの取り組みをリサーチした。そこで、海の豊かさを取り戻すために、ウミガメ保存会の人々が立ち上がったことを知った。工業地帯の四日市ではあるが、今は生物が多様に共生できるよう保全していて、吉崎海岸は環境省から「自然共生サイト」として認定されたそうだ。

私は今、その清掃活動に参加できてとてもほこりに思っている。海岸には、たくさんのゴミが落ちていた。ペットボトルがくだけて細くなった破片も一つ一つ目をこらして、ていねいに拾っていった。その日は多くの人が参加していたので、数時間で海岸がきれいになった。

最後に、海はつながっているのだから、三重だけでなく全世界の海が少しずつ美しくなり、砂浜でウミガメに会うことが私の望みだ。

「ウミガメ、戻ってきてね。ウェルカメ。」

優秀賞

私の貢献できる未来 ～誰一人、絶対に取り残さない～

〔兵庫県〕

松蔭中学校 1年 石山 文香

今頃、彼女はどうしているだろう。もう一度会えるのなら、今度こそ言いたい。

「教えるよ。」

小学2年生の夏。転校生がやって来た。元々出入りが激しい学校だったため転校生がやってくることは珍しいことでもなかった。しかし、この日やって来た転校生との思い出は、今も、まだ私の記憶に強く根付いている。そしてこれからもう忘れることはないだろう。なぜなら彼女は日本語が話せなかったからだ。

ダブルリミテッド。この意味が分かる人は、私が想像していたより少なかった。ダブルリミテッドとは、小さいころに日本に来たため日常会話の日本語はしゃべることはできるが、読み書きや授業で使われる日本語が理解できない上、母国語も忘れてしまい両方の言語が年齢相応に発達していない状態のことだ。私は大人になったら、ダブルリミテッドになった小学生や中学生を助ける仕事に就きたいと思っている。なぜなら、彼女とふた夏を過ごしたからだ。

2年生の秋。私は初めて彼女としゃべった。少し英語が得意だったこともあって、英語を交えながら簡単な日本語で会話をした。彼女は外国生まれ外国育ちで、両親とも日本語が話せないらしい。そのため家では常に英語を使って会話をしている、と言っていた。冬になると、彼女は時々教室から突然出て行くようになった。声をかけてみたら、「日本語わかる。でも、先生の言うこと、わからん。やること、ない。」と、たどたどしい日本語で言っ

た。3年生の冬になると、彼女は日本語で会話ができるくらい理解できるようになったようだった。「でも、授業は何言ってるのかほとんどわからん。」そのためか、テストはいつも9割以上空欄だった。その時期に英語の授業が本格的に始まり、ALTの先生と話す機会も多くなった。彼女はペラペラと英語を話すのかと思ったが、詰まったりしてスムーズには会話が続かなかった様子だった。

「英語忘れたわ。家ではあんま話さへんから。日本語はもっとわからん。」彼女が少し困ったように言った。

どうして、私はあの時言えなかったのだろう。「日本語、教えるよ。わからない単語ある？」と。4年生になり、クラスが離れてしまったきり、何も話していない。話さないまま、彼女は別の小学校へと転校してしまった。

「教えるよ。」この一言さえ言えていたら、少しは彼女の学校生活が変わっていたかもしれない。SDGsにも、「誰一人取り残さない」というものがあるが、ある言語が「わかるけれど、わからない」状態では、その達成は不可能だろう。彼女は常にポツンと一人であった。目標を掲げる以上、それは達成しなければならない。私は大人になったら、いや、今からでもできる。学童などと連携し、「誰一人取り残さない」ように、日本語だけでなく母国語も教え、彼女のような小中学生の未来に貢献したい。言葉がわからないまま成長していく未来を無くしたい。だから、日本語、教えるよ。

優秀賞

SDGsと高齢者福祉について

〔沖縄県〕

昭和薬科大学附属中学校 1年 具志堅 駿太郎

今年の夏休み、僕は母が働いている介護施設でボランティアをしました。母は管理栄養士として施設で高齢者の食事を考えています。僕がボランティアをすることになったのは、母から「夏休みに家でダラダラと過ごすくらいなら、施設のおじいちゃんやおばあちゃんのお手伝いしてみない？」と誘われたからです。この経験は、SDGsを達成するために、僕たちが今からできることを考えるきっかけにもなりました。特に「高齢者福祉」に興味を持つようになったのは、施設での体験が大きかったと思います。

介護施設では、いろいろな体験をしました。例えば、食事介助です。食事介助は、食べるのが難しい方に対して、食事を口に運ぶお手伝いをする事です。初めはとても緊張しました。手が震えてしまって、スプーンがうまく使えませんでした。介護士さんが「ゆっくりでいいよ」と優しく声をかけてくれて、少し安心しました。その後も、食器片付けやお風呂の後のドライヤーをかけるお手伝いなど、いろいろな仕事を体験しました。どれも普段の生活では経験できないことばかりで、新鮮でした。

特に印象に残ったのは、高齢者の方々が食べているお粥ゼリーです。僕は普段、普通のご飯やおかずを食べているので、少し驚きました。そこで、僕は母にお願いして、実際にお粥ゼリーを食べさせてもらいました。味は少し薄くて、食感も普通の食事とは違いましたが、これは高齢者の方々が食べやすいように工夫された食事なんだと母から聞きました。その話を聞いて、「高齢

者福祉」の大切さが少しずつわかってきた気がしました。

入居者の方々にとって、食事は楽しみの一つであると同時に、生きる力を支える重要な要素です。しかし、高齢になると、咀嚼（そしゃく）が難しくなったり、味覚が変わったりするため、普通の食事を食べる事ができなくなることが多いそうです。そこで、施設の管理栄養士さんたちは、栄養バランスを考えながら、高齢者が美味しく安全に食べられるように、工夫した食事を提供しています。このような取り組みは、SDGsの目標3「すべての人に健康と福祉を」につながる大切な活動だと感じました。

また、介護施設での体験を通じて、僕は「人と人とのつながり」の大切さも学びました。入居者の方々は、日常生活の中で多くのサポートが必要です。そのサポートをするためには、介護士の方々だけでなく、食事を作っている調理師さんや健康を管理している看護師さん、地域の人々やボランティアの力も必要です。僕が体験した様々な事は、僕たちが日常で見落としていることに気付きました。

僕がこの夏のボランティアを通して考えた事は、「SDGs」と「高齢者福祉」が深くつながっているということを実感し、SDGsを意識しながら自分にできることをやる事が大切だと思いました。

私達の未来を救うために

〔福島県〕

須賀川市立第三中学校 1年

三本松 采花

今、この地球ではさまざまな問題が起きています。ロシアとウクライナの紛争、そして食料の値上げなど数えきれないほどの悩みをかかえており、その中でも一番の問題は地球温暖化だと私は考えます。この地球温暖化の悪化をたち切るために私は『地球温暖化防止ノート』というものを作るとともに、一週間に一度の家族会議の時間を設けることを提案しました。

まず『地球温暖化防止ノート』について説明します。このノートは今、私達が地球温暖化を食い止めるためにできることをまとめてそれを実行させるためのノートです。例えば、冷房の設定温度は二十六度まで、ゴミの分別を必ず行うなどといった私たちでもできるちょっとした簡単な課題をまとめています。私はこのノートを作ったことで、「使っていない電気は消そう。」「これはまだ使えるかも。」など自然に地球温暖化を防止するための行動ができるようになりました。これは私だけではなくもっと色々な人を知ってもらいたいと思い、まずは家族に紹介してみました。

私はこのノートを一から説明していると家族がこんなことを言いました。それは、「ノートに書いてあるこの課題をポイント形式にして家族みんなで対戦してみたら良いんじゃない。」といったものでした。私はこのルールを聞いて楽しそうと思い、やってみることにしました。一週間で何ポイントためられたかを

発表するために家族会議の時間を作り、一週間で何ポイントためられたかを報告するというルールも追加しました。このようなノートを作ることで家族で楽しみながら地球温暖化を防止できるようになりました。家族も「このノートを作ってよかったね。」と言ってきて、とてもうれしい気持ちになりました。

少し前の私は地球温暖化なんて他のだれかがどうにかしてくれればいいと思っていました。でもそれはどんどん深刻になっていく地球温暖化を見て見ぬふりをしていたとも言えます。だから、私には関係ないではなく、少し地球温暖化防止に取り組んでみようかなと思うことが大切だということをみんなに広めていきたいと思いました。少し考えを変えるだけで地球を救うための一つの力になります。このノートを私の家庭からその友達、その家族とたくさん紹介していきたいです。そしていずれは地球全体の人々に知ってもらい、地球の人々全体で地球温暖化を防止できるようにしたいです。私のつかんだ一つの力を地球という大きな世界に広めていけたらいいと思います。地球を救い、明るい未来へ。

植物発電で世界を救う

〔神奈川県〕

横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校附属中学校 1年 高木 七生

四年生の夏休みである。毎日の新聞に有機物から作られたゲーム機が発明されたという記事に私は驚かされた。そこから、身近なもので発電できないかと考え、植物からなら発電できるのではないかとひらめいた。父と母の力を借りて、実際に研究してみたところ、わずかに微量ではあったが電気を植物から採取することが出来た。このことから、植物発電で今のエネルギー問題に貢献できるのではないかと思い、エネルギー問題とその影響について調べてみることにした。

調べてみると、次のようなことが分かった。まず、エネルギーの枯渇問題では、世界のエネルギー資源を同じペースで掘り出し続けると、石炭で約百三十九年、原子力発電の燃料となるウランで約百二十八年、天然ガスで約四十九年、石油で約五十四年しか持たなくなってしまうという非常に危機感を感じる記事を見つけた。さらに、枯渇の心配がある燃料を用いて発電している火力発電の影響では、石油や石炭を燃やすことによって二酸化炭素が排出され、その二酸化炭素が地球温暖化や異常気象、海水面の上昇の原因になっていて、それによって直接影響を受けた人は五千二百万人と大勢いるという事が分かった。そこで、近未来を明るくするエネルギーとして近年注目されているのが、再生可能エネルギーだ。再生可能エネルギーとは、自然界に存在するエネルギー源を活用し、枯渇することなく、永久に利用できるエネルギーの事である。再生可能エネルギーには、太陽光発電、

風力発電、水力発電、地熱発電、水力発電などがある。これに続いて、植物発電というものを私は提案したい。植物発電は、二酸化炭素を排出し、被害をもたらす火力発電などとは異なり、植物が無くならない限り発電をすることができ、木を切り倒さなくても発電できる。ということは、森林保護にもつながり、もし東南アジアや中央アフリカなど熱帯雨林の増加にもつながるかもしれない。他の利点としては、学校の周りで発電できることだ。だいたいの学校の周りには、木や植物が生えているはずである。私が通っている学校にも植物を育てているところが色々などころにある。そのため、植物が必ずどこかに生えている学校では、植物発電を行う事ができ、学校で使用する大量の電力を少しでも補えるかもしれない。全国に小中高学校に広めていくために、まずは、自分の通う学校で、たくさんの植物から学校で使用する電力をどこまで補えるのかという実験を実際に行いたいと思う。

四年生のころの実験で学んだ植物発電、植物電気を実用化に近づけられるように、私はこれからも植物から多くのエネルギーを発電する方法を考えて研究していきたいと思う。そして、いつか電気が届かない場所に規模が小さくても発電可能な植物発電の装置を設置して今電気を使えず不便な暮らしをしている人たちに電気を使ってもらいたいと私は思う。

審査員
特別賞

変人の使命

〔岡山県〕

ノートルダム清心学園清心中学校 3年 森岡 玲圭

「あなた達はねえ、変人なんですよ。」と若い研究者に真顔で言われ、「あなた達の1人称が昆虫なのか人間なのか分からなくなってくる。」とも言われた。昆虫の研究を続けている理由を尋ねられ、素直に答えただけなのに、変人とまで言われるとは驚いた。私達の本当の生活を知ったらどう言われるだろう、と思った。

私と弟二人だけで、鶏を飼い始めた。ヒモ代220円と廃材だけの鳥小屋を設計し完成させた。3羽いたヒヨコは森に住む何者かに食べられて1羽になったが、合成飼料を与えず大事に育てている。鳥小屋の横で枝豆も育て始めた。鶏のフンを肥料にし、出来た枝豆は鶏の餌にして、循環させている。レンガ3つを組んだカマドも作っている。お米も炊けるし、枝豆も焼ける。作った竹炭に火をつけ、池のトノサマガエルをさばいて炭火焼きにして食べた。それが、初めて自分で殺して食べた生き物だった。「食べないものは殺さない」のが自然界の鉄則だ。スーパーで鶏肉を買って、ろくに鶏のことも考えずに食べ残す人間の無責任さを、私達は知っている。

授業で生物多様性について調べていると、「虫なんかいなくなっちゃえばいいのに。」という声が聞こえた。その言葉に先生は、空気の成分割合が変わるとか、農作物がうまく育たなくなるといった答えを返すだろう。確かにそれも正解だが、私は「虫が、かわいそうだね。」と答えるべきだと思う。私達人間が困るから助けてあげる、という考え方では、生き物は守れない。鳥取環境

大学の小林先生は、野生動物との接触経験が多いほど、生き物と同じ立場になりやすく、自然保護の意識が高まる、と言っている。つまり、生き物を守るために必要なのは、生き物を理解して、生き物目線になることだ。

それなのに今、自然と遊ぶ人が減ってきている。自然と遊べなければ、生き物目線になり、自然を守ろうとすることも難しい。自然を愛し守れる人を増やし、未来に自然を残すために必要なことは何か。それは、子供達が自然と触れ合える場を作ることだ、と私は考えている。

私は今、子供達を集め、虫取りの他に、火おこし、弓矢作り、蛙釣りなど、色々な遊びを実施している。ためらいがちだった子供達も最後には「また来るねー。」と元気に帰っていく。子供達の親からも、また遊ばせてやってほしいと頼まれる。

豊かな自然の中で子供時代を送った人達は、自然保護の意識を持つようになるだろう。もし、全ての子供達が自然と共に育ったならば、アスファルトで舗装された大地を見て、その下に閉じ込められたセミの幼虫たち、生活の場を奪われてしまったカマキリたちに、誰もが思いを巡らせることができるはずだ。そして、人のためではなく野生動物のために、自然を守ろうとするだろう。そんな人を一人でも増やすことが、草を見るとバツ目線で「おいしそう!」と言ってしまうほど自然好きに育ってしまった私の運命であり、使命だと思う。

審査員
特別賞

海洋ごみで何かできるのか

〔山口県〕

周南市立富田中学校 2年 吉村 心結

私は、夏休みに家族と海に遊びに行きました。その時に海がきれいなことよりも砂浜にごみが多いことにびっくりしました。ごみの中には、木材やプラスチックが多くみられました。砂浜にごみが多いため怪もしやすく危なく、普通に歩くことができませんでした。このごみは、何とかならないのだろうかと考え、海洋ごみについて調べてみました。

海洋ごみの中でもプラスチックごみが世界的に問題視されています。半永久的に分解されることがなく、プラスチックごみを食べたことで海の生き物が死んでしまった事例が報告されています。さらにマイクロプラスチック、これは5ミリメートル以下になったプラスチックのことをいい、それを食べた魚を私たちが食べることの悪影響が懸念されています。私たちにできることはプラスチックごみを出さない、海に捨てない、海でゴミを拾うことです。海洋ごみの量は東京ドーム112杯分ほどあり、66%をプラスチックが占めています。ただ今回、私が何とかしたいのは木材です。これは海洋ごみの7%を占めています。何とか減らすことはできないか、何かに役立てられないかと調べてみました。祖父に相談すると海洋ごみの木材を利用して活性炭を作り、その活性炭を利用して半永久的に使用できる蓄電池を作ることができるという資料があると教えてくれました。祖父の力を借りて、その資料をもとに活性炭を作ることにしました。まず海に木材を集めに行きました。活性炭にするには800度の高温で1~2時

間熱しなくてははいけません。この方法では困難であると判断し、他に方法はないか調べました。30%塩水と炭を混ぜ直火で3時間加熱すると炭が活性化し、活性炭ができます。この方法で活性炭を作り、アルミ板と組み合わせることで蓄電池が出来上がります。自由研究もかねて、実験した結果、蓄電することが出来ました。小さいモーターを回すことができ、活性炭を作ることに成功しました。手間と時間はかかりましたが海洋ごみの木材を使い活性炭を作り、半永久的な蓄電池を作ることができました。

木材は活性炭にすることでいろいろな使用方法があります。悪臭、雑菌、汚染物、アレルギーを空気や水から取り除くのに役立ちます。今回は、蓄電池を作ってみました。他に室内の空気の浄化、浄水化フィルター、フェイスパック、ぼう満感の解消などがあり、自分たちでも作れる活性炭で海洋ごみの木材を少しでも減らすことができると分かりました。ただ、大量の木材を活性炭にするには私には難しいと感じました。しかし、自分の力で何とかすることができ何かに役立てることが出来ることが分かり、地球環境を守るために何かに気付くこと、調べること、行動することが大事だと気付かされました。



同じ地球に暮らす仲間として

〔山形県〕

山形大学附属中学校 3年 鈴木 慶雅

国連が掲げる「持続可能な開発目標 (SDGs)」の達成に向けて、多くの国が様々な取り組みを続けています。日本に住む私たちは、解決すべき問題に関心を持ちながらも、貧困や紛争の中で生きる人々をどこか遠い存在として感じてはいないでしょうか。彼らの環境や生活状況を知るだけでなく、彼ら自身を深く理解し、身近に感じ、同じ地球に暮らす仲間としての意識を持つことこそが私たちを問題解決のための具体的な行動へと導くと私は思うのです。

2年前に留学先の英国で、ロシアとの戦禍にあるウクライナの少年と友人になって以来、紛争や貧困に苦しむ子どもたちに貢献できることはないかと考え続けていました。特別な力がない中学生の私は、なかなかその機会を持っていませんでしたが、昨年、ラオスの孤児院・児童養護施設附属学校でボランティアをする機会を得たのです。

後発開発途上国への渡航は初めてで、自分がラオスの子どもたちの役に立てるのかと不安でしたが、沢山の子どもたちが眩しい笑顔で私を迎えてくれました。貧困により家族と離れ、満足に食べられなかったり、十分な教育を受けられなかったりと不自由な面も多々あるはずですが。それなのに、子どもたちはいつも周囲に感謝を示し、楽しく生きようとする気持ちに溢れていました。他人を羨まず、より良い自分になるには、より良い環境を作るにはどうしたらよいかを考える姿に私は心を動かされました。

水道もガスもないコックナン村に舟で向かい宿泊した際も、家禽を晚餐のためにさばき、健康と繁栄を祈るラオス伝統の儀式「バーシー」を執り行い、沢山の村人が私の手首に糸を巻きながら祈りを捧げてくれるなど、大変温かい歓迎を受けました。彼らと触れ合い、互いを深く理解したことで、彼らのためにできることをしたい、子どもたちの可能性を広げたいという私の想いは非常に強くなりました。帰国後もラオスが自分の一部になったように感じ、次の訪問で何をするかを頻りに考えています。また、私のラオスでの経験を聞いた人たちが援助を申し出てくれました。そして、SDGsを達成するための鍵に気づいたのです。

メディア等で伝えられている表面的な情報だけでは、遠い地で暮らす私たちが彼らを身近に感じることは難しく、具体的な行動まで繋げることは困難です。そこで暮らす人々の想い、人間性、魅力を伝え、同じ地球に暮らす仲間としての意識を持てるような働きかけや取り組みこそが人々を行動に導き、SDGsを達成する原動力になるのではないのでしょうか。私は、今後も様々な国を訪れ、人々と触れ合い、分かち合う経験を積み、メディアでは伝えられていないような情報を日本で伝えていきたいです。また、渡航先で知り合った人々との橋渡しとなるイベントの企画、開催などを通じて日本の人たちに世界の人々を身近に感じてもらえるような取り組みをしていきます。生まれた国が違っても、私たちは同じ地球に暮らす仲間なのです。



未来の地球のための意識改革

〔群馬県〕

ぐんま国際アカデミー中等部 3年 柳澤 怜央

このコーヒーかず、もったいないなあ。コーヒーを入れていて、ふと考えた。

僕の家族は皆コーヒーが好きで、家でよくコーヒーを入れる。コーヒー豆を挽いて、コーヒーメーカーで抽出するのだが、コーヒーを入れるたびに大量のコーヒーかすが残ってしまう。コーヒーかすは量が多く処分も大変なのではないか。気になってコーヒーかすについて調べてみたところ、コーヒーかすには想像以上に多くの問題があることを知った。

2021年地点での国内のコーヒー消費量は年間約42万トンである。さらに抽出後のコーヒーかすには、かすの重さと同量の水分が含まれるため、実際にはその倍のごみが発生している。この膨大なコーヒーかすを処分するためには、多くの埋め立て地や焼却エネルギーを必要とする。さらに、長時間放置されて腐敗したコーヒーかすから、温室効果の高いメタンガスや二酸化炭素が発生する点も問題視されている。僕はこのコーヒーかすをどうにかできないかと思い、コーヒーかすの秘めた可能性を探ることにした。

コーヒーかすの再利用について調べたところ、企業による大規模な雑草抑制効果の実験が行われていたことを知った。しかし実験の詳しい結果はわからなかったため、独自で研究を行うことにした。

土のみを入れたポットと、土とコーヒーかすを入れたポットを用意し、屋外に置き観察した。その結果、土のみ入れたポットで

は雑草が生えたが、コーヒーかすを入れたポットでは生えなかった。この実験から、コーヒーかすには雑草が生えてくるのを抑制する効果があることがわかった。コーヒーかすは除草剤として使うことができるのだ。

環境問題について僕たちができることはなんだろうと考えたとき、今までは、環境汚染につながるからごみを増やしてはいけない、と漠然と思っていた。しかしコーヒーかすのように、ごみを地球上にとどめておくだけでも、環境に負荷がかかるということを知った。新しいごみを増やさないようにするのももちろんだが、今あるごみについてもきちんと向き合っていかなければならない。

コーヒーかすについて調べてから、僕を取り巻くさまざまなものに対する見方が変わった。今日食べた野菜の皮は、何かに使えないだろうか。さっき飲んだお茶の葉っぱも、コーヒーかすのように除草剤として使えないだろうか。こんな風に、身の周りのあらゆるものについて、他の使い道はないかと考えるようになった。

リサイクル製品やリユース回収などといっても、なんだか遠い話で、環境の負荷を減らすためにどうつながっているのか、あまり実感が湧かない。だからこそ、身の周りにあるものに対する意識を変え、環境にどうやさしくできるかを常に考えることが、未来の地球のために僕たちができる第一歩だと思う。

近年、SDGsでも話題にあがっている貧困問題。私たち学生も授業で習い、知っている問題だと思う。では貧困問題を身近な問題だと実感できている人はどのくらいいるだろう。おそらく多くの学生は貧困問題を外国の問題だと思っているのではないかな。私もその一人で、教科書に載っている外国の写真を見るばかりで、自分の身の回りで起こっている貧困問題を見失ってしまっていた。

私が貧困問題に興味をもつようになったのは姉が「こども食堂」のボランティア活動に参加したことがきっかけだ。こども食堂とは地域の住民が主体となり無料または低価格で子どもたちに食事を提供するコミュニティの場だ。子ども食堂は経済的に満足に食事をとれていない子どもを助ける以外にも孤食を防いだり交流の場を作ったりする目的があるが私に日本にも貧困に苦しんでいる人が多くいるということを知ることができた。

実際、二〇二二年度の日本の子どもの貧困率は一一・五％で九人に一人が貧困だそうだ。こんなにも身近なところに貧困で苦しんでいる人がいることを知り、今の生活にありがたみを感じると同時に今まで周りの人も自分と同じような生活を送っていると思いこんでいたことが腹立たしく感じた。また、私がすごく悲しいと感じた声がある。それは「友達と遊んでお金を使うことを避けるために学校では友達を作らない」というものだ。貧困が生活や将来の選択肢を制限してしまう、悲しいものだという

痛感させられた。

私たちにできることはたくさんある。例えば寄付だ。寄付できるものにはお金だけでなく、衣類や日用品、食品がある。私たち学生にお金の寄付は難しいと考える人も多いかもしれない。しかし一口千円からの寄付を募集している団体もあり、その少しの意識の差が多くの命を救うことに繋がるのではないかな。また、普段給食で栄養を摂取している子どもたちにとって夏休み中の食品寄付はすごく重要だ。いつも食べ残してしまっている分を寄付することで希望をもつ人がいるのだ。

教育支援や子ども食堂のようなボランティア活動は苦しんでいる人々を救うだけでなく、自分を成長させてくれると思う。

貧困問題に関わらず、世界規模の問題を解決するには、その問題をいかに身近なもの、自分に関わっているものとして捉えることができるかが最も大切だと思う。「まずは知るところから」とよく言うがそこで終わってしまえば意味がない。行動をおこすべきだ。身近な問題だと思えることができれば行動を起こすハードルは確実に下がるはずだ。他人事と思わず、全員が小さなことを続けることで問題解決に近づくことができるのではないかな。

私は英語が嫌いです。私は日本人だし、英語や他の国の言語なんて話せなくても生きていけると思っていました。けれど、学校で「ピースメッセージ」という取り組みを行い、英語に対する考え方が大きく変わりました。

「ピースメッセージ」とは、修学旅行中に外国人に英語で話しかけ、平和に関するメッセージをもらうという活動でした。英語が嫌いな私は、話せるわけがないと絶望しました。

当日、修学旅行で自由行動になり、いよいよ話しかけねばならない時間がやってきました。すれ違う外国人が皆怖く見えてしまいました。

友達が次々と外国人に話かけていたので、私も勇気をふりしぼり、大学生くらいの、グループで訪れていた人達に声をかけました。笑顔で話を聞いてくれたけれど、私は成り立っているのか分からない英語を発し、伝わっているのか分からないジェスチャーをしていました。

私が話し終え、恐る恐る顔を上げると、外国人の人達は皆笑顔でGoodマークをしていました。外国人にピースメッセージを書いてもらっている間、他の人達は握手やハグをしてくれました。最後別れるときは、「You are best friend!」と言ってくれました。

私はピースメッセージを行い、他の国の人と交流することは、未来の地球のため、私たちができる最初の一步なんだと思いま

した。今世界では、戦争が起こっている国があります。反対に、交流を行っている国もあります。

戦争は人の命を奪い奪われ、得は一つもありません。それでも戦争を行う国には、「言葉」がないのではないのでしょうか。他の国の人と分かり合い、平和を築くには、相手と話すことが大切です。相手と話そうとする、「言葉」がないと一生伝わりません。

私はピースメッセージを行いました。英語は嫌いながらも、相手は自分のことや気持ちを伝えるため、大切だということは分かりました。そして、英語がしゃべれなくても、ジェスチャーや伝えようとする気持ちが「言葉」となり、相手に伝わると感じました。

「言葉」で伝えたからと言って、戦争などの争いがすっきりなくなることはないでしょう。「言葉」によってすれ違いが起き、争いが起きてしまうこともあると思います。けれど私は、これからは他国の人と交流することを大事にし、恐れず、まずは会話をしてみることを心がけたいです。

国際協力
特別賞

「自分事、として」

〔新潟県〕

糸魚川市立能生中学校 3年 丸田 恋夢

私が通う中学校は、SDGsの活動に力を入れています。例えば、コットンプロジェクト、地元の海岸のゴミを拾う海岸ゴミ拾い、駅や保育園、介護施設に鮮やかな花を贈呈する花街プロジェクトなど、様々な取り組みを行っています。

コットンプロジェクトとは、糸魚川で農業を使わずに栽培したオーガニックコットンを使用して、赤ちゃんの肌着を作り、それを糸魚川市で生まれた赤ちゃんにプレゼントする、という取り組みの協力を始めて五年目になります。昨年は、自分たちが栽培したコットンを使って糸を作り、その糸で編み物をしました。そして、昨年から一班一鉢プロジェクトも始動しました。集団の一番小さい単位となる班でコットンを栽培しました。そのプロジェクトの目的は、他人事ではなく自分事として捉える、ということです。私は、どのような取り組みをしても自分事として捉えていないと意味がないと思います。先日の道徳では、「変わりゆく地球」という地球環境について、現状では、地球温暖化ではなく、地球沸騰化になっているということを知り、節電や節水をする、残食を減らしていくことが大事だということクラスみんなで学びました。だけど、昼休みや移動教室の授業の間などクーラーがついている教室の扉が開いていたり教室の電気がついていたり、給食で多くの残食が出たりと、地球環境を悪化させていることばかりです。コットンプロジェクトや海岸ゴミ拾いで地球環境を良くすることに貢献していても、身の回りのことがきちんとで

きていないと意味がありません。だから、私は他人事ではなく、自分事として捉えることが大事だと思います。

世界中の人たちは、地球環境や地域紛争、戦争についてのニュースを「地球のどこかで誰かが起こしている出来事」だと思っているかもしれませんが、そのニュースは地球に住んでいる人全員が関係していると思います。日々の自分の行動や、身の回りの出来事について見直してみたら、地球環境を悪化させていることに気付いていないだけで、多くありました。例えば、シャワーや水道を流しっぱなしにしていたり、面倒だからといってゴミを分別せずに捨てたりしていました。これからもずっと住み続けられるような地球を作っていくために、考えるだけでなく、身近で、できることからいいから、行動に移していこうと思いました。

国際協力
特別賞

「命」～共生するということ～

〔長野県〕

泰阜村立泰阜中学校 2年 栗田 いろは

日本では毎年約六十二万トン、世界では約十三億トンの食料が廃棄されています。一方で約九人に一人が満足にご飯を食べることが出来ず苦しんでいます。そもそも、食料には限りがあります。私たちは「モノ」を食べることはできません。他の生き物の命を頂かなければ生きていくことはできないのです。

私にとってスーパーに並んでいる肉と魚は「食べ物」という認識でした。皆さんもテレビでライオンがシマウマを襲っているのを見て可哀そうだと思ったことはありませんか。私は、普段食べている肉も魚も同じように人が生きるために犠牲になっていることを本当の意味では知らなかったのです。一部の人々がどれだけ食品ロスをなくそうとしても、多くの人々が現状を知らなければ、食品ロスをなくすことは不可能なのです。だから、私はどんな方法でも見て知り、自分で考え行動するということが大切だと考えます。

私は、職場体験学習でジビエ加工施設へ行きました。そこでは、シカなどが生きていた状態から販売されるまでの工程をすべて見て体験することができました。目の前で鹿が命を落とした時、命を頂くことがどういうことなのか初めて本当の意味で知りました。

命に興味を持ち、ジビエ加工施設に職場体験学習に行かなければ、人生で肉や魚は「食べ物」という認識でしかなかったでしょう。知ることはとても怖いことです。知らなければ良かった

と思うこともあります。ですが、私は知ったからこそ考え、どう生きていくか選べました。極端に肉や魚を食べないのではなく、一人一人が自由に選択して良いと思います。だからこそ現実を知り、選択することが大切です。きっと命の循環を知り自分で考え決めた人は、命に感謝して食べ物を無駄に捨てたり、無碍に扱ったりはしないでしょう。

もし誰も食品ロスについて関心を持っていなかったら、今よりもっと問題は深刻だったでしょう。知る。食品ロスについて知っている人が増えるだけで明日の未来は変わります。

確かに、食品ロスをなくすことはできません。しかし、何も知らず過ごすのでは知っていて少しでも変える方が必ず良くなります。この問題に関係のない人はいません。

だからこそ「食べる」とそこには大切な命が犠牲になって自分が生かされていることから目をそらしてはいけません。私は、目の前で人が生きるために命が消えた瞬間を見ました。その経験をこれから多くの人に伝えていきたいです。生きることに密接に関係している「食べる」「命を頂く」を考え、たくさんの命に生かされている今を大切にしたいです。実際に見て知ること、思考すること、行動していくことの大切さをジビエ体験から学びました。私は、肉も魚も食べると決めました。しかし、目の前で命が消えたこと、どれだけ命が尊いかは絶対に忘れません。

世界気象機関(WMO)は、二〇二三年七月の世界の平均気温が過去最高になる見通しを示した。国連のグテーレス事務総長はこれを受け、「地球温暖化の時代は終わり、地球沸騰化の時代が来た」と述べた。

今、地球温暖化は急速に進んでいて、すでに影響が現れ始めている。海水面の上昇によって島国での浸水が進み、洪水をはじめとする自然災害は増加している。気温や海水温の上昇は、生態系の変化を加速させる可能性もある。

地球温暖化は、日本を含む小数の国々の活動による影響が大きい。しかし地球温暖化は世界全体に及んでいる。そのため温室効果ガスをほとんど排出していない国も大きな被害を受けてしまうのだ。さらに問題なのは、そのような国の多くは温暖化への対策が難しいことである。先進国と比べて対策のための資金や人材がないことが原因で、より深刻な被害になってしまう。つまり先進国の活動によって発展途上国がより被害を受けているのである。

僕は、この現状を知って自分たちの意識の低さに怒りがわいてきた。地球温暖化とか、SDGsとかの言葉はよく知られているが、逆に言葉だけが先走りして生活は全く変化していないのではないかと思った。

現に、僕も今まで常に地球の抱える課題を気にしてはいなかった。僕たちは普段は自然と離れて過ごしているため、環境問

題は知っていてもどこか遠い存在のように錯覚してしまう。だから、まずはその意識を変えていかなければいけないと思う。僕たちにできることは、いくらでもある。一日に使うティッシュを一枚減らすだけでも、数億人の人が続ければ何本の木が伐採されずに済み、どれだけの有害な水や薬品が排出されなくなるだろうか。

例えば僕たちは、食品ロスを減らした方が良いことは分かっている。でもやっぱり、棚の奥の商品を買いたくなるし、賞味期限が切れているだけでも怖がって食べない人もいる。知識はあるのに行動ができない、この原因は地球温暖化を実感する機会がなく、危機感がないことだと思う。ただそうは言っても、全ての人の意識を一気に変えることは不可能である。

だから僕は、特に大きな活動をしているわけではない。ただ、リュックにいつも小さなエコバッグは入っているし、ペットボトルの飲み物を買うことはほとんどない。何だそれ、と思うかもしれないが、それを「やる」と「やらない」で選ぶとき「やる」方が少しでも世界が良くなるなら、そっちを選んだほうがいいと思う。

世界を変えることはできなくても、少しずつみんなが行動すれば世界を少し傾けることくらいはできるかもしれない。だから僕はこれからもずっと、小さな行動を続けていきたい。

少し前に動物園に行った。そこには、陸上生物だけでなく、鳥や魚など多種多様な生物が展示されていた。展示を見終わりに、帰ろうとしたときに、一枚のポスターが目にとまった。それにはこう書かれていた。

「あなたのプラスチックが水鳥を殺した。」

この言葉に心が揺れた。普段SNSを見ていると、死んだ水鳥やウミガメの動画を目にすることがある。その度に“プラスチックは控えよう”と思うものの、それ以上の行動はしない。しかし、今回は違った。なぜなら、水鳥やウミガメを見た直後だったからだ。深く考えさせられた。

マイクロプラスチック問題は、今や社会常識となっており、小中学校の教科書でも取り上げられる。そこで、一緒に来た小学生の親戚にこの問題について尋ねてみた。すると彼はこう答えた。

「学校で習った。なんか悪いやつだね。」

あっさりした返答に少々驚きつつ彼は続けた。

「でも、あんまりよくわかんない。」

文部科学省がせっかく教科書に載せているのにも関わらず、実際に学び、行動する当事者が「なんか悪いやつ」と曖昧な理解でいることに疑問を覚えた。しかし、かくいう私もマイクロプラスチックについて、詳しく知っている訳ではない。現在、世界では年間八百万トンものプラスチックが排出されており、プラスチックは

年間八十億本が捨てられているという。数字で見ると、その多さに圧倒される。しかし、私には海を漂うマイクロプラスチックを回収することも、プラスチックを規制する法律を作ることも、プラスチックを分解し自然に返す技術を開発することも現実的には不可能だ。

では私たちには何ができるのか。「無闇にプラスチックを使わない。」その通りだ。「ビニール袋を使わず、エコバッグを利用する。」それも重要だ。しかし、私たちができることで最も大切なことは、

「この問題を身近に感じること」

ではないだろうか。学校で、「マイクロプラスチックは環境に悪いから、プラスチックを使うのを控えましょう」と言われても、遠い世界の話だと感じる。しかし、「プラスチックを食べた魚を私たちが食べると、体に悪い」と言われる方がより身近な問題として捉えることができ、「極力プラスチックを出さないようにしよう」という意識が自然と生まれるのではないだろうか。

結局のところ、私たち一人ひとりがマイクロプラスチック問題を「自分ごと」として捉え、日常生活の中で、できる範囲の行動を積み重ねることが環境を守る第一歩となるのだろう。「自分とは関係のない世界だ」と尻込みせず、正しい知識を持ち、環境にやさしい選択をすること、それこそが、私たちにとって本当に大切なことなのだと思う。

国際協力
特別賞

小さな取り組み

〔大阪府〕

大阪教育大学附属池田中学校 2年 倉地 咲之介

今、世界で大きな問題の一つになっている「食品ロス」。現在世界では、一年に約9億トンもの食べられる食品が捨てられ、無駄になっている。さらに、そのなかでも家庭から出る食品ロスの量はその約6割にも当たる。それを聞き僕は最初、食品ロスは工場やスーパーなどの大きな場所から出ていると思っていたのでとても驚いた。一方で、世界では、アフリカなどで食べるものがなく貧困状態にある人たちがたくさんいる。食べ物を無駄にしているのに食べ物が無い国がある。これを聞いたとき僕はとても疑問を感じた。このことについて、僕はなにかできることがあると考えた。

夏休みの活動で僕は、「エコイート」という賞味期限が近かったり切れていたりして売れなくなった食品を安く売っているお店にいった。そこには、もう賞味期限が切れていたり、近かったりするものだけでなく、半年以上も期限が残っているものもあり、幅広い商品がおいてあった。例えば、大きな箱に入ったグミが通常の値段の1/5ほどの値段で売られていたり、ペットボトルのジュースが一本50円ほどで売られていた。他にもゼリー、カップラーメンなど様々なものが安く売られていた。その中にまだ賞味期限に余裕があるものも多く、このようなものも捨てられるという食品ロスの現状を知った。そして、僕はこのお店の店長さんから食品ロスについての話を聞かせてもらった。

「食品ロスは企業もなくす努力はしているが、一番ロスが多いのは家庭からだから、一人一人の小さな取り組みが一番食品ロスの削減につながるんです。」僕はこの言葉を聞き、たしかにそうだなと思った。「塵も積もれば山となる」という言葉のように、一人一人ができることは少ないけれど、全員が小さいことをコツコツとしていって最終的に大きな成果につながる。これはとても大切なことだと思った。更に店長さんは、近くの小学校で食品ロスについての講演を行い、知識をより多くの人に知ってもらう活動もしているのだという。一人で取り組むことだけではなく、周りの人にも知識を広めていくというのは、とても難しいし行動力がある。それができる店長さんを、僕はとてもすごいなと思った。

今、僕の家庭では食品ロスを減らすための小さな取り組みを行っている。それは食べ残しをしなかったり、冷蔵庫が空になってから買い物に行くなどの本当に小さなことだ。しかしその小さなことが大きな成果につながっていくと僕は思う。僕は大きな問題を解決するために、一人ができることというのは、本当に小さいように感じるけど、全員がその小さい取り組みをすることで大きな問題への解決にもつながる。自分には何もできないと決めつけずに、なにかできることをしようという考え方をもちて生活することでいい未来につながっていくと僕は思う。

国際協力
特別賞

Peace Starts at Home: The Role of Family in World Harmony

〔奈良県〕

奈良教育大学附属中学校 3年 アルハム ジュルカルナイン

「ドカーン！」耳をすませば今でも聞こえてきそうな爆発音。それとは別に幼い子供の泣き声も…聞こえてくる。ウクライナやパレスチナなど最近テレビで戦争についてのニュースが多くなっているように感じているのはきっと私だけではないと思う。国と国の争い、政権と政権の争いなど幼い子供になんの関係があるだろうか。家族を失わないといけない理由や一般の人々が傷つかななくてはならない理由がどこにあるだろうか。このような疑問は全ての人類が戦争のときに考えたことがあると思う。また、私達は日本に住んでいるから別に戦争を気にしなくてもいいと思っている人がいるのかもしれない。しかし、自分が平和な人生を送っているからといっていつ戦争が襲いかかってきてもおかしくない。自分に戦地に行く勇気はない。だからといって何も関係ないと思うのではなく自分にできることを探して実行することが大事だと思う。だから、私は募金活動に協力している。

ある日、私が出かけている時にたまたま募金活動をしている人を見つけた。私は財布をポケットから取り出し「千円くらい寄付しようかな」と思ったが、財布には小銭と五千円札しか入っていなかった。一瞬、迷ったが五千円を寄付した。それで苦しんでいる人が少しでも楽になるのであれば、このあと自分にお金が必要になるかなんてどうでもよかった。

次に、世界平和を実現するための一歩として考えたことがある。近年、科学技術が急速に発展しているが、私達の人間性は科

学技術の発展においついていないのではないのだろうか。いや、むしろ薄れていっているように感じる。この原因の一つとして家族間でのコミュニケーションが年々少なくなっていることがある。私はほぼ毎年海外に旅行に行っているが、この前の旅行のときのシンガポール空港で新たな気づきがあった。それは、待ち時間中、大人から子供まで9割以上の方がスマホに夢中で自分の家族とコミュニケーションすらとっていないことだ。私達の人生にはメディアなど家族関係を切断する要素が多くなってしまっている。いや、自分で悪い道を歩んでいると言ったほうが正しいのかもしれない。私は家族の関係こそ良くすれば世界平和に繋がるのではないかなと思う。なぜなら、「人間性」は家族をベースに生まれるからだ。もし、家族関係から私達一人一人が100%の人間性を持つことができたなら家族をスタート地点とし地域、社会、国、世界へと連鎖して世界平和を実現できるのではないかと私は信じている。

最後に、エジソン、アインシュタイン、ジョブズ…世界を変えた偉人たちは、決して社会の流れに自分を「合わせ」なかった。むしろ、社会に自分たちを求めさせた。だから、自分も含めて私達は他の動物にはない「人間性」を持つ一人として世界平和を実現する一人一人のリーダーになっていきたい。

誰もが苦しまなくていい未来のために。



「教育は鍵である」

〔愛媛県〕

愛媛大学附属高等学校 3年 飯田 夕和

「教育によって世界を変えていく」

私は、小学生の時にウガンダの子ども達をホームステイで受け入れ、教育は夢と希望を与えると知った。そして高校入学後、モザンビークを支援し続けているNPO代表の方との出会いをきっかけに、モザンビークを教育の視点から追究し始めた。しかし、ネットや本で調べても情報が少ない。そこで、実情を見るため昨年の夏に渡航した。現地では、平日にも関わらず物売って歩く子ども達の児童労働や開発が進む街と電気も水道も通っていない村との大きな格差等を目の当たりにし、解決すべき社会問題の数々は「教育が原点」だと考えた。そこで帰国後、主に四つの取組をしてきた。1つ目は「話し合うこと」と「学ぶ意欲」の関係性を見出す研究だ。現地の人達の学ぶ意欲を感じたことで、日本の教育分野の課題はその低さではないかと考え、学生や教育関係者等にアンケートを取った。341名の回答から、話し合うためには雰囲気・関係性が大切で、学ぶ意欲が高まるだけでなく、創造的思考や他者理解にも繋がることを見えてきた。2つ目は教育を循環させるための活動だ。まず、社会問題や地域のこと等を「知る」ために講演会やワークショップの場に赴き、自分事と捉える学びを得てきた。また、「知る」きっかけ作りをしたいと思い、小中高大や地域社会、国際等約30の場で帰国報告・発表等を行ってきた。中でも、私に世界を知る楽しさを教えてくれた恩師の小学校で出前授業をした際、当時の自分がそうであったように子ども達が目を輝かせ、全て吸収しようとする姿があった。その縁で、この夏モザンビークの小学校教師がその学校を訪問・交流し、両国の教育の可能性が広がったと感じると同時に、「教育は循環している」と実感した。そして持続的な教育連携への挑戦として、今まで交流してきたモザンビークの高校と本校の「姉妹校提携提案書」を本校校長に提出した。実現に向けて駐モザンビーク(前)特命

全権大使、JICA研修生等と意見交換する中、先進国と途上国関係なく社会問題は存在し、互いに知り学び合うことが解決への第一になると改めて考えた。更に、学校横断型学習のために他校とのモザンビーク交流会を立ち上げた。学校を越えた横の連携・協働が必要だと考えたからだ。両校にとって初の試みである上、各校学習の場が異なり知識や活動内容が違うため、交流会の日程や内容を決めるのは簡単な事ではなかったが、両校の良さが活きるよう両校の代表者で思考錯誤し、話し合い、工夫を重ねた。交流会後の参加者アンケートからは、両校の学生が刺激を受け合い、外国を知ることで自国が見えてくる様に、他校を知ることで自校を知るきっかけになったことが分かった。3つ目は、教材作りだ。人と人、国と国の架け橋になることを願い、国旗をモチーフにしたゲーム「Friendshipキューブ」を考案したり、自分の渡航をもとに誰もがモザンビークを模擬体験できる「渡航すごろく」等を作ったりして、交流の場で活用してきた。4つ目は現地のフェアトレードを普及啓発するための応援商品の開発だ。モザンビークの伝統布で自分が縫った浴衣を着て文化祭のブース案内を行ったり、学生の需要や好みを知るためのアンケートを取ってオリジナルクリアファイルやぬいぐるみキーホルダーを考案したり、現地やフェアトレードを身近に感じてもらう「入口」となる工夫をしてきた。渡航を通し、全ては「知る」ことから始まると実感した。同時に、そこから得た学びに対して今自分にできることを継続的に行ってきた結果、教育の可能性が広がってだけでなく、沢山の人と出会い、多くの経験が生み出され、学びの輪が広がり繋がっていくことを強く感じた。私には、教育によって子ども達の可能性を広げるという夢がある。今後もグローバルな視点を持ち、「今自分にできること」をカタチにして、一歩ずつ進んでいく。



「新たな付加価値から切り開くフェアトレードの未来」

〔東京都〕

東京学芸大学附属国際中等教育学校 5年 中川 心之介

私のフェアトレードの思いは、ベトナム・ホーチミンに住んでいた頃に芽生えた。ホーチミンでの体験が、私のフェアトレードへの思いを芽生えさせた。コーヒー店で出会ったクホ族の親子。言葉は通じずとも、その純朴な笑顔に心打たれた。しかし、彼らの暮らしは厳しく、特産のコーヒー豆も不当に安く買い叩かれていた。言語の壁や社会的立場の弱さゆえ、不平等な取引を強いられる現実。同年代の長男を見て、やるせない思いが募った。この経験が、公正な貿易の重要性を私に教えてくれた。彼らに会って以降、現地でフェアトレードを広める活動をしてきた。そして「日本ではフェアトレードはもっと広まっているのだろうか」と期待を馳せながら帰国すると、想像以上に広まっていなかったのだ。

私が貢献したいフェアトレードというものは、社会的価値に富んでいながら、利益が生まれにくいものだ。フェアトレードという大義によって値段が他より高い商品より、フェアトレードではないが安く、ある程度質の高い商品の方が購入される。では、なぜフェアトレード商品は高いのか。これは、大量生産にはない良さ・背景があるからである。しかし、その商品の質を感じられる機会がなければ、なぜ値段が高い所以を理解できないままだ。私は利益を生みにくいフェアトレードだからこそ、そこに利益を生み出すビジネスモデルを確立して、倫理的価値と経済との葛藤を解消しようと考えた。

少し話題が変わるが、近年、CSRやフィランソपी、ESG投資などのワードが頻用されるようになった。これが示しているのは、企業がフェアトレードなどの社会問題の改善に携わることで新たな付加価値が生まれているということである。そこで、この新しい付加価値を利用したフェアトレードを日本に浸透させるためのビジネスアイデアを思いついた。

現在、私は「Fair Link」という事業を進めている。「Fair Link」は、フェア

トレードスナックの量り売り自販機を通じて、フェアトレードを日本に職場から浸透させるB2B2Cの事業である。通常の商品より高くフェアトレード商品は手に取りにくい現実。その中でFair Linkでは、フェアトレード商品の値段が高く、買いにくくなっている分を新しい付加価値「フィランソपी代」で補う。B2Cでは値段が高くなる背景としてあったフェアトレードが、B2Cを経由することで企業のフィランソपीの素材となるのだ。企業から頂いた「フィランソपी代」が販売機内で売られる商品の代金を下げ、社員がフェアトレードを買い求めやすくなるというシステムである。なお、「フィランソपी代」は財務レポートなどに掲載可能となる。これにより、サービスを取り入れた企業にとって、株主へのアピール、そしてESG投資の促進にも繋がる。また、フェアトレードスナックの「量り売り」販売機であることも大きな特徴であり、社員はその場で必要としている量・買える量に合わせて選ぶことができる。また、少量ずつ様々な食材を試すことができ、より多くのフェアトレードスナックを体感することもできる。環境面では、食品ロスや商品ごとの包装材を削減できる。都内の外資系の会社のオフィスで実演販売した際に、予想以上に社員の方や社長さんがフェアトレードの浸透とビジネスとしての利益を両立できていると褒めてくださった。その時初めて、何か世の中に少し貢献出来ているのかなと思えて、素直に嬉しかった。

私は、このビジネスを通じて、購買力の高い先進国の日本でフェアトレードを浸透させることで、フェアトレード商品の需要を安定化させ、SDGs目標10「人や国の不平等をなくそう」に貢献したいと考えている。「Fair Link」の自販機が職場にないと、その企業が時代に置いていかれている印象を持つような「フィランソपी・CSRが当たり前の社会」の象徴となる存在へと作り上げていきたい。



寄付は寄付だけではない

〔山形県〕

山形県立米沢興譲館高等学校 1年 渡會 愛香

私の母はシングルマザーである。とはいえ、私は学校に毎日通っているし、その日の食事に困ったことは一度もない。父と離婚が決まったとき、母は言った。

「私たちは日本に生まれているだけで幸せ。途上国では、もっと苦労している母子家庭もあると思う。本当に尊敬する。」

小学四年生の私は考えたことがなかった。母の言ったことを調べてみて初めて、私たちのような母子家庭という存在が、世間から手厚い支援を受けていることを知った。児童扶養手当、ひとり親家庭等医療費援助制度、…きっとまだまだあるのだろう。発展途上国については、調べても情報をあまり得られなかった。挙句には「知ったところで何もできない」と思ってしまい、調べる手を止めた。しかし高校生になり学校でSDGsについての学習に取り組んだときに、ふと思いついた。海外にだって母子家庭はある。彼らの助けになる方法が必ずあるはずだ。それだけの想いで自分にできることを探した。

そうして見つけたのが、ケニアのシングルマザー食料支援ボランティアだ。三人の子供をもつお母さんとオンラインで繋ぎ、話を聞いたり、寄付金を受け取ったお母さんの買い物の様子を見たりした。話を聞いて最初に驚いたのは、そのお母さんの月収と家族全体の食生活だ。家賃は月五万円なのに対し、月収は三〜四千円。食事は一日に一・二回とる日や、何も口にすることのない日があるという。信じられなかった。自分がどれだけ恵まれているかを痛感した。日本で暮らす私の母。ケニアで暮らすお母さん。同じ人間で、シングルマザーなのに、こんなにも境遇が違うのだ。その子供にも同じことが言える。加えて、今まで自分が知らなかったことを後悔した。もっと早く知っていたら、自分が日本に生まれ、母子家庭ながらも平穏に暮らせていることに感謝できていたはずだからだ。支援金を受け取り、買い物を済ませたときのお母さんの笑顔は、今も忘れられない。

“May God bless you.”といい、一ヶ月分の食料を抱え、嬉しそうに家に帰っていった。私も胸がいっぱいになり、お母さんの喜びが同じことのように感じられた。

このボランティアでは、参加者は皆「チャイルドドクター制度」という医療支援制度に加入し、一人の子供にお金を寄付する。「寄付は、裕福かつ心の広い人がするものだ。感謝や見返りがなくてもいい、お金に余裕がある大人が。」以前までの私の考えである。初めて寄付をして数週間。母に、支援先からメールが届いた。支援している子供のお母さんからである。文面には、子供の健康状態や私と母の近況を気遣ってくれる内容とともに、感謝の意が表されていた。私は自分が間違っていたのだと悟った。寄付は、寄付だけではないのだ。支援者と被支援者が互いに理解し合い、心を寄せ合うこと。チャイルドドクターになって、それを実感することができた。また、自分が世界の人の為に貢献し、繋がることができているということが嬉しかった。

“寄付”や“発展途上国”と聞くと、「そんな大それたことはできない」と身構える人がいる。確かに途上国が集中する地域は日本から遠く離れており、大きなことに感じるかもしれない。見えないところで苦しむ人々がいるのはみんな知っているだろうが、実際に寄付する人というのはまだ少ない。だから、自分の身の回りの人が苦しんでいることを想像し、“自分事化”することで、一円でも支援しようと思えるのではないか。私の場合、その対象が自分の母親だったという一例にすぎない。これを読んだあなたが、少しでも寄付で世界の人と関わろうとしてほしいと思う。

地球のためにできること。それは、人との繋がりの中で初めて成立するのではないか。その為に私は、これからも、大人になっても寄付を通してチャイルドドクターとして、人の役に立ち、交流を続けたい。いつか、誰一人取り残さない社会が実現することを願って。



「パートナーシップ」で、世界は変わる。

〔埼玉県〕

さいたま市立大宮国際中等教育学校 3年 綾部 真宙

「パートナーシップで目標を達成しよう」

これは、SDGsの17個目の目標であるが、他の16個の目標とは明らかに毛色が異なる。「貧困をなくそう」や「質の高い教育をみんなに」などは、それがどのような目標なのかすぐに理解できるが、「パートナーシップで目標を達成しよう」とは何なのだろうか。調べてみると、すべての国が協力してSDGs達成を目指すことだと書いてあったが、具体的に何をするのか、正直私はよく理解できていない。そんな中、私はあることをきっかけに、この目標こそSDGs達成のために特に重要な目標であり、私たちが意識すべき目標だと思うようになった。

私は、高校2年生の時から、JICA地球ひろばでボランティアをしている。地球ひろばは、国際協力についての展示やワークショップを行う施設だ。私はボランティアとして、地球案内人と呼ばれるスタッフの方の手伝いをしつつ、自分自身も展示を見たり、地球案内人の方のお話を聴いたりして学びを得ている。私は、このボランティア活動を始めて、自分自身が世界の課題に真っ正面から対峙できていないことを痛感した。世界では、今この瞬間も戦争や紛争が起きているということ、貧困や飢餓で苦しんでいる人が大勢いるということ。どちらも自分自身で理解しているつもりだった。でもここで、体験型の展示を見て、地球案内人の方の青年海外協力隊での経験を聞いて、自分が理解していることが真の国際理解ではないことに気付いた。解決の為に自分には何ができるのか、考えるべきはそこにあった。

そんな中、私は学校である一つの募集を見つけた。全国の高校生が一堂に会し、それぞれが各国の大使になりきって会議をする「模擬国連」大会の参加募集だった。私は同級生の友達とペアを組み、この大会に参加することにした。私たちの担当国はアルゼンチンだった。国名は知っているが、正直サッカーというイメージしか思い浮かばないくらい、私はアルゼ

ンチンに関する知識がなかった。そのため、事前調査では、その国の基本的な情報から議題に対する立ち位置まで、幅広く調べた。いざ会議本番。同世代の高校生とそれぞれの政策をぶつけ合った。しかし模擬国連の面白いところは、それがディベートではないということである。国連の会議は、「国際社会としての結論」を見出していく場所で、大使は自国の視点と国際社会の視点の両方を持たなければならない。また、解決策を生み出すのには豊かな想像力が必要だった。同世代の仲間と協力し、高校生ならではの創造力から解決策を創り上げていく。そこに私は大きな魅力を感じた。その時、私はふと感じた。これが、SDGsが示す「パートナーシップ」なのではないか、と。

そして私は、このことをより多くの人に発信しようと思い、まずは校内で、「模擬国連サークル」を立ち上げた。私の通う学校は中高一貫校であるため、その特徴を生かしてサークルのメンバーは中学生から高校生まで幅広く集めた。サークルでは、模擬国連でのスピーチなどの練習をすることはもちろんだが、最近の世界的な課題についてディスカッションをしたり、SDGs関連のゲームをしたりするなど、模擬国連とは直接関係しない活動にも積極的に取り組んでいる。なぜなら、目的は単に模擬国連のスキルを上げるのではなく、「国際理解を深め、より良い解決策を創造する思考を鍛えること」だからである。

私が取り組んできた地球ひろばのボランティア、模擬国連、そしてサークル活動は、寄付や技術協力といった直接的な国際貢献ではないかもしれない。しかし、これらは世界の問題に対して協力して解決策を創造する「パートナーシップ」の必要性を広める取り組みだ。これを通じて、一人でも多くの人がパートナーシップを結び、SDGsという共通の目標に向かって努力すれば、世界はきっと変わる。私はそう信じている。

高校生の部
JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト2024 優秀作品集

優秀賞

自作の絵本で伝える児童労働

〔神奈川県〕

横浜共立学園高等学校 2年 金指 沙絵

私は昨年、教育がテーマの高校生模擬国連大会に参加して、発展途上国の子供が貧困のため児童労働に従事し、教育を受けられない現状を知り愕然とした。児童労働に従事する子供は学校に行かれず、字が読めないため将来にわたって良い仕事に就けない。そして貧困は何世代にもわたって連鎖してしまう。そして多くの場合、きつい仕事や危険を伴う仕事をしなければならず、健康を害し、命の危険を伴うこともあるのだと知った。彼らは自分の夢をかなえることが出来ないばかりか、夢が何なのかさえ、知る由がないのだ。

私は怖くなった。それは、同じ年頃の子供たちが働かされているという悲惨さへの恐れと共に、その現状を今の日本で多くの人々が知らず、また関心も持たれていない事への恐怖だ。先進国の日本では発展途上国の働く子供の事なんて話題にも上らないのだ。

私はこの児童労働について調べてみよう、まずは関連の本を探した。しかし、私が模擬国連で担当したアジアの国の児童労働についての本は図書館でも書店でも見つからなかった。そこで、大使館、日本カンボジア協会の理事、JICAなどを訪問して取材を重ねた。そしてカンボジアのJICA支援のカシューナッツ工場の関係者から話を聞き、この工場ではフェアトレードの導入により、児童労働の減少に成功したと知った。

カンボジアでは今まで密輸などで買いたたかれていたカシューナッツを、JICAの支援によって工場で製品化まで自分たちの手で出来るようになった。そして品質の改善や販売ルートの管理により、労働者の収入は約4倍になり、ジェンダー平等により女性の雇用が生まれた。これらの結果、家計が安定して、子供は学校に行かれるようになったのだ。また品質の改善などを工夫する中で、人々に学ぶ意欲が生まれて、教育の環境が整い始めているらしい。

残念ながら、支援する側の日本では、これらのJICAの活動は知られていない。

私はこの事実を日本の多くの人々に伝えたいと思った。働く子供が教育

を受けられない現状。そして、フェアトレードが進めば、子供が学校に行かれるようになる事を知ってもらいたいのだ。

そこで私は自分で絵本を作った。貧しい村の教育を受けられない少女が、村にフェアトレードの工場が出来たおかげで、学校に行かれるようになって、自分の夢をかなえる話だ。児童労働の本は、探してもどこにもなかったから自分で作ることにしたのだ。これは未来のために私が出来ることの第一歩だと思った。そして、夏休み中に頑張って、絵本を完成する事が出来た。この絵本を読めば子供でも児童労働を理解できるように注釈などを入れて工夫した。

そして、多くの人に児童労働の現実を理解してもらうために、私は様々な人達にこの絵本を使い説明した。代議士や知事、大学教授、医師会長などに会いに行った。そしてこの絵本はJICAのホームページでも2回紹介され、ライブラリーにも展示してもらった。いくつかの小学校が世界人権週間絵本を生徒に紹介してくれるそう。私は児童労働について知ってもらうために、私に出来る事を一生懸命した。

しかし、私の活動では、現実的にはフェアトレードは進まないし、児童労働が減らせる訳ではない。関心を持ってくれる人は限られている。私は壁にぶつかったように感じた。

では私達が今未来のために出来ることは何だろうか。私はたとえ今すぐに社会を動かすことが出来なくても、私が発展途上国の働く子供の身になって考えた事は意味があると思う。まず自分が社会問題に関心を持ち、行動を起こし、誰かに伝える。そしてあきらめずその輪を少しずつ広げていく事が大切だと思う。そして多くの人が発展途上国の現状を自分に置き換えて想像出来るようになれば、全ての子供に教育が必要だと訴える私の活動は、確実に実を結んでいくと思う。関心を持ち続け、訴え続けることが未来のために今、私に出来る事だ。この絵本は私の未来への道標になっている。

優秀賞

「未来の海を守るために」

〔石川県〕

金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校 1年 中村 嶺治

中学2年の夏、日本海を望む健民海浜公園の砂浜で、私は岩牡蠣と藻が付着した青いペットボトルを見つけた。岩牡蠣と藻はそのペットボトルに密着し、あたかも共存しているかのように思えた。しかし、それは大きな間違いだとすぐに気がついた。なぜなら、辺りをゆっくり見渡すと、半径10m以内に多くのプラスチックゴミが落ちていたからだ。理科の授業で、「2050年には魚よりプラスチックゴミの量が多い海になることが予測されている。」という先生の言葉を思い出した。そして、目の前の光景を見て、私はその未来はすぐ目の前に来ていると危機感を抱いた。

ASEAN諸国を中心とした途上国では、プラスチックが人々の生活に深く浸透しているが、同時に海洋へのプラスチック流出量が全世界の約6割に上ると推測され、大きな問題となっている。JICAは、以前より途上国における廃棄物管理等の支援を行ってきた。

そこで、当時中学生だった私は、私自身でも何か出来る出来ないかと考え、植物由来のバイオプラスチックに着目し、分解実験を行うことにした。

バイオプラスチックの分解される条件が明確になれば、石油由来のプラスチックがバイオプラスチックに代替され、世界の海に存在すると推定される合計1億5000万トンに及ぶプラスチックゴミ増加の歯止めの一助になるのではないかと考えた。

実験1年目では、ストローやレジ袋を「海水・真水・水道水・土壌・海砂」にそれぞれ埋め、毎日経過観察と7日毎に質量を測定した。その結果、水溶液より土壌の方がバイオプラスチックは分解されやすいと分かった。

実験2年目では、土壌に着目し、「苗を植えた土壌」「何も植えていない土壌」「コンポスト」の各土壌にバイオプラスチックを埋め、比較実験を行った。試料は生分解性プラスチック製品を製造している大同至高株式会社より提供を受け、実験を行った。そして、生分解性プラスチックは「コ

ンポスト内が50~60℃の時に最も分解が進む」、「加水分解してから微生物によって生分解される」という成果を得た。

一方で、コンポストの維持はとても大変であった。生成には1か月以上かかり、毎日生ゴミを入れた後に攪拌する作業は体力を有した。また、夏場は虫が湧き、ツンとした臭いは思わず鼻を覆いたくなる程だった。このような状態では、いくらバイオプラスチックをコンポストで分解することが出来ると分かっている、各家庭内に普及することは難しいと感じた。

そこで、プラスチック問題に早くから取り組んでいるヨーロッパから学べることはないかと考え、私は今年の夏に渡英した。イギリスでは「生ゴミの分別収集」がされており、専用の袋や新聞紙に生ゴミを包み、設置された生ゴミ専用のゴミ箱に入れることになっていた。回収された生ゴミは嫌気性消化施設で処理され、家庭や企業の電力源となる持続可能エネルギーとして使用されていた。コンポスト設置は各家庭に委ねられ、その点においては日本と違いはなかったが、イギリスでは「リサイクルが出来るか否か」という視点でゴミの分別がされていることに大いに興味を沸かした。さらに、フランスでは2024年より生ゴミのコンポスト化が義務化されるなど、制度面においてヨーロッパはかなり進んでいると分かった。「これらの制度を日本や他国にも導入出来れば」と強く感じた。

現在、私は大学の高大連携プログラムに参加し、バイオプラスチックの研究を続けている。コンポストにおける分解の条件をより明確化し、その成果を発信し続け、日本のみならず、途上国にもバイオプラスチックやそれらを分解するコンポストが普及されることが最終目的である。私の活動はまだ始まったばかりだ。しかし、今行動せずして未来は変えられない。2050年の海が、生物が生きるための美しい海であるために、これからも私は研究という側面からプラスチック問題解決への努力を続けていきたい。

幸せな生活とは

〔宮城県〕

仙台育英学園高等学校 1年 花田 稟果

「私も稟果みたいな幸せな生活を送りたい」

そう話してくれたのは、私のオンライン英会話の先生だ。私は、中学一年生からオンライン英会話を毎日欠かさず行っている。新しい国の先生方と出会う中で、奇跡的に私ととても性格の似たザンビア人の先生と巡り合った。毎日の会話を経て、日々の生活やお互いの悩みなど全て語れるような関係にまで成長した。ある日、学校で外国人に日本についてのプレゼンテーションを行った話をしていると、急に彼女の目からは涙がこぼれ落ち始めた。私は次の瞬間、彼女の口から出た言葉に衝撃を受けた。彼女が言った言葉。それは、「稟果に会いたかったのに会えなくなっちゃった。私も稟果みたいな生活を送りたかった。」だった。実は、彼女は20歳にもならないうちに予期せぬ妊娠をしてしまい、シングルマザーとして約5年間必死に子供達を育て続けてきた。その5年間の間、私には想像もしていなかった苦悩の日々と戦っていた。彼女の家庭は、あまり裕福ではなかったため学校に行くことができてもまともなご飯を食べることができず、衛生的な水を飲むこともできない生活を余儀なくされていた。そのような生活が続いた中、最終的には家すら持つことができなくなってしまい、外で暮らす生活がしばらく続いた。彼女は、生きているだけまだ良いと言葉を発してくれた。ザンビアにいる人々は学校に行くことができず勉強ができなかったり病院に行けず、早々に小さな命を失ってしまう人々は少ないという。それを聞いた時の衝撃は私の心を大きく動かしした。私は、学校に行くことができ、美味しいご飯を食べることもできている。私たちが日常的に行っていることがザンビアの人々にとっては当たり前でないことを初めて知った。

それから私は、ザンビアについて興味を持つようになり、追究していくようになった。ザンビアで起こっている貧困問題や現状など、様々なことを

調べた。そこで私はこのような貧しい暮らしをしている人々を救いたいと思うようになった。まず第一歩として昨年度、募金活動を行った。赤十字募金やユニセフ募金などを行い小規模ではあったが多くの人が協力してくれたため、合計で20万円近くの寄付金を集めることができた。その寄付金はウクライナの子供達のために使われた。今年度は宮城県にいるザンビアの方と協力し、小学校でワークショップを行った。宮城県に在住しているザンビア人を探すのに苦労し、何度も諦めようとしたが多くの団体の方々の支援により見つけることができた。生徒たちからは、ザンビアに行ってみたくらいという声やザンビアの文化や食べ物が魅力的で関心を持ったという声など様々な意見をもらい、小学生との交流を経てザンビアという国を多くの人々に広めることができ、興味を持ってもらうことができた。これらの活動は全て私が自主的にやりたいと思い行動したものが、次のステップとしてザンビアに行き現地の人々のためになる活動を行いたいと考えている。

最後に、私たちが住んでいる日本という国は他国に比べ安全な国であり、貧富の差が小さい国である。しかし、世界にはアフリカ諸国やインドなどの国々のように貧困国と呼ばれるような国があり、私たちが日常的にできていることが困難な国もある。私たち人間は、様々な悩みを抱え精神状態が崩れてしまうことも多いかもしれない。ただ、私たちは幸せな生活を送ることができているということだけは忘れないでほしい。

「私の夢は国際連合で働くことです」中学一年生から描き続けている大きな夢。この夢を抱ききつかけになったのも私の英会話の先生だった。彼女のように強く逞しく生きる女性を目指して、私は世界中の多くの人々を助けることができる人間になりたい。

人のつながりと平和と技術

〔東京都〕

東京都立科学技術高等学校 1年 井上 美奈

未来のために私が現在取り組んでいることは、平和のために技術がどのように役に立つかを研究し、社会実装することだ。私が平和と技術に関心をもつ理由は、怖がりな性格とこれまでの活動、世界のさまざまな地域からつながってくださった方々が関連している。

きっかけは10歳の時に起業体験イベントに参加したことだ。そこでサービスづくりの楽しさをおぼえた。それと同時に若い起業家が多いと言われるエストニアに関心を持ち、10歳でクラウドファンディングを活用しエストニアへ渡航した。現地の起業家の方や政府の方たちと連絡先を交換できたことで日常的に連絡し合える環境ができた。帰国したその日の夕方に参加をした起業体験イベントで、3位と約1ヶ月後にシンガポールで開かれるカンファレンスで自分の考えたサービスについてピッチを行う権利を頂いた。ピッチに加え世界中から参加された投資家や起業家にインタビューを実施し、よりつながりが広がった。このような経緯から、私は国や地域を超えた人のつながりとテクノロジーが生み出せるものに関心をもった。11歳の時、サービスと私個人の人格を分けたいと思った際には、いくつかの国の制度を比較し、サービスと相性のよさそうなエストニアに法人を設立（登記名義は親権者）した。小学生から中学生の間は、国内外でのワークショップやアイデアソン、国や地域や年齢を超えて登壇者の方や参加者を集めてのオンラインイベントなどを主催したり、授業の提案を行い国内の小中学校やカンボジアの高校で実施し、試行錯誤を行った。さまざまな国や地域の方々から頂いたつながりや機会が、成功も失敗も含めて今の私を育ててくれたと思う。

そのような私に転機がおとずれたのは2022年の2月だった。同年9月に複数の国をつなぎ自然と文化とテクノロジーをテーマとしたイベントを企画、そのイベントを3月に開く準備をしている時だ。ウクライナとロシアについてのニュースだ。両国はエストニアにも近く、渡航の際はロシア

を経由することもあった。私は初めて紛争を身近に感じるとともに、争いが人も自然も文化も一瞬で壊すこと、平和がなければ人も文化も自然も保てないと痛感した。急遽イベントのテーマに「平和」を加え、考え直した。役に立てることを探そうと、エストニアに避難をされた方と現地の方とのSNSグループに参加したことで、現地での助け合いをリアルタイムで知ることができた。地球上で人は争いと助け合いの両方を行っていることを改めて認識し、私は助け合う道を選びたいと強く思った。

その後、大使館への問い合わせ、現地の知人へのヒアリング、主催したイベントでウクライナからポーランドへ避難をした学生の方たちとオンラインで意見交換の時間をつくるなどしながら、自分ができることを模索した。その過程で、避難をされた方々の努力をはじめ、現地の方、政府、国連の方のご尽力もあり避難先での生活や修学を維持できる方もいる。一方で、多く難民を受け入れた国では国内で全ての方に仕事を提供することは難しく、生活が維持できないために危険を知りつつウクライナへ戻る方もいるという現状を知った。また、日本での難民受け入れの現状や課題も知ることとなった。

これらの課題を解決する仕組みの開発を進める過程で自らの技術的な知識不足を感じた私は、夕方以降の時間や、中学校の了承を得てお昼休みに東京大学大学院と京都大学院の勉強会、書籍の執筆への参加、イベントの共催などを行いつつ、高校へ進学。これらの活動や学びを続けつつ、現在は難民の問題については難民の受け入れに貢献しようとする特定の国だけが大きな負担を抱えるのではなく、地球全体で一人一人の人が協力し合える仕組みなど、国を超えた協力につながる仕組みの実装に取り組んでいる。容易ではないが、1つずつかたちにして1人の人間として未来に貢献したい。

机で繋がる地域と林業

〔奈良県〕

奈良県立大学附属高等学校 1年 奈良 百華

ある日、机が変わった。

私の通っていた中学校では、ある日机が全て代わりきれいな大きな机になった。

私はユネスコクラブという部活に所属しており地元の林業について学んでいた。そしてある日実際に地元の林業従事者の方にお話を伺う機会があった。

林業従事者の方からのお話では、林業がどれほど地域社会にとって重要であるかが強調されていた。木を植え、育て、伐採し、その後また植林するというサイクルを繰り返している。このサイクルは、持続可能な森林管理の基盤であり、森林が健康で豊かな状態を保つには欠かせない。林業は、単に木を供給するだけでなく、土壌の安全、水の循環、生物の多様性の維持にも重要な役割を果たしているようだ。

また、林業にも多くの課題も存在することがわかった。例えば、林業の労働力不足や高齢化、価格の不安定さなどが挙げられる。これらの問題は、林業が持続可能な産業として成り立ち続けるためには解決しなければならない課題である。

「持続可能な林業とは何か?」

私たちはこの疑問について考えた。後継者問題や産業の衰退、若者の参戦など様々な意見があった。しかし、どれも未成年の私たちには難しいものがあつた。

そんな中、ひとつの意見が挙がった。「木材をもっと身近なものにしたらいのではないかな?」これなら私たちにもできるんじゃないかな? そう思い、早速実践することになった。私たちにできること、それは県産材を学校で使うこと。学校で、最も多くの人で触れるであろう机が県産材にか

わつたら、今いる私たちだけでなく次の世代にも使い続けることができても身近に触れることができる。また、それに地産地消として県に貢献することもできる。

地産地消とは、地元で生産されたものを地元で消費するという考え方である。これは、輸送にかかるエネルギーを削減し、地元の経済を支えることができるため、環境にも地域にも優しいとされている。天板の交換も、まさに地産地消の一例である。県産のスギを使用することで地元の林業を支援し、持続可能な資源の利用を促進することができるのではないかな、そう考え私たちは行動にうつすこととなった。

図面を県内の業者に送り予算もでた。多くの人が関わり、携わった。

そんな多くの地域の方々の協力とともに、とうとう天板を交換する日がきた。今までのポロポロだった天板は明るいスギの天板になった。関わった人だけでなく、多くのボランティアが募り、みんなが天板の交換を手伝った。とてもきれいで、教室はぱっと華やかになった。教室にはスギの香りがたちこめた。みんなの顔は明るく、生き生きとしていた。

それに加え、学校の中で今回の天板交換、そしてそれによって得られる影響について、伝える機会が設けられた。全校生徒に、わたしたちの成果をともに県の林業について伝える機会は私にとってとても自分自身が成長するきっかけとなった。

私たちが天板を県産のスギに交換することで得た学びは、単なる環境への配慮ではなく地域社会への貢献、林業への理解、そして持続可能な未来への意識の向上にもつながった。この経験を通じて学んだことを胸に、私たちはこれからも地元の資源を大切に未来の地球に対してベストとれる選択を積極的に行っていきたいと考えている。

「知りたい」のその先に

〔鹿児島県〕

鹿児島県立鶴丸高等学校 3年 初田 心和

十六席のシアター。観客は私と叔母を含めた四人。私は今、宮崎の小さな映画館にいる。ある雑誌で見た、「六度目の大量絶滅」の文字。怖くなった。知らなきゃいけない。私の不安をかき消すような解決策が、この映画にはあるかもしれない。

二〇二一年にフランスで公開された映画、「ANIMALぼくたちと動物のこと」。カンヌ国際映画祭でドキュメンタリー賞にノミネートされた作品がようやく日本で公開されることになったのだ。しかし、私がよく足を運ぶような大きな映画館では上映されない。二十五都道府県の小さな映画館でのみ上映された。この作品は、動物保護と気候変動問題に取り組むベラとヴィブランのドキュメンタリー映像。映画監督で活動家のシリル・ディオンに導かれ、世界七か国を巡る旅に出る。二人は一六歳ながら、抗議行動やストライキ、デモ活動に参加し、環境保護活動に関わってきた。声を上げ続けても、デモの翌日には抗議の熱は冷め、政治家が即座に対応に動くことはめったにない。

「私の努力と成果が見合っていない。」

そう話したベラは、社会に、人間に、そして自分自身にも失望しているように見えた。

二〇二四年、二月、私自身も鹿児島ユニセフ協会の学生ボランティアチームに加入した。今日までの半年間で、保育園への出前授業や図書館での啓発用ボードの作成、ラジオでの啓発運動など、様々な活動を行ってきた。

七月二十七日と二十八日の二日間、ある商業施設で小学生を対象としたSDGsに関する大きなイベントを開催した。ウクライナの伝統の人形であるモタンカ作りを体験できるブースや水と衛生、ごみの分別を学ぶブースなど、計七か所のブースを設置した。ウクライナの写真には、ロシアによるウクライナ侵攻開始後の悲惨な現状が映し出されていた。自分の家が

炎に包まれる様子を呆然と見つめる人。泣き叫ぶ子ども。暗い地下の避難施設の様子。私もこのイベントの開催を通して、知らなかった現状を突きつけられた。「何か力になりたい」と思わずにはいられなかった。施設の担当者との打ち合わせの時点で、参加人数は二日間で約200人と見込まれていた。多くの人にウクライナの現状を知ってもらえると意気込んでいた。

しかし、実際に参加した人数は五十人。

「SDGsの体験イベント開催中です。」

通りゆく人々に声を掛けても振り向いてもらえない。真っ青のTシャツに白い「UNICEF」の文字。私の姿は人々の目にどう映っていたのだろう。

ベラとヴィブランは、フランスで食用ウサギの飼育場を訪れる。ウサギ一匹当たりの飼育スペースはA4サイズ一枚分。ケージに閉じ込められたウサギの悲惨な現状を目の当たりにした二人は、「これを見たらウサギを食べる人はいないだろうね。」とつぶやいた。

種の絶滅、気候変動、国際紛争。世界で起きている問題は、私たち自身が知ろうとしない限り、浮き彫りにすることはできない。知らないままでいることだってできる。プラスチックを使うことに、捨てることに、動物の肉を食べることに罪悪感を覚えることもないし、紛争で犠牲になった人に心を痛めることもない。誰かにとってはその方が「しあわせ」なのかもしれない。だけど、私は「知らなかった」の先にある暗闇に目をつぶっていることはできない。平和に過ごすことができるという有難さ、命をいただくことの有難さ、地球に生きられることの有難さを噛みしめて生きなければならない。私が思う「幸せ」を実現するために、私は今日も「知る」という選択をする。



「生きるための選択と教育の意味」

〔宮城県〕

独立行政法人国立高等専門学校機構仙台高等専門学校 2年 高橋 桃奈

私は今年の夏、教育に関する調査のために、東アフリカに位置するタンザニアを訪れた。そして、マサイの子供達が通う幼稚園で教育ボランティアを経験した。そこでの経験は私の価値観を180度変え、一生忘れない貴重な体験となったのである。

休み時間、子供達は教室を飛び出て校庭を走り回る。「Teacher!」と私を呼び、見慣れない肌の色とストンと落ちたストレートの髪の毛を触る。「抱っこして!」と一気に何十人も言ってくるものだから「一気には無理だよ。」と言っても飛びついてくる子供達は本当に元気一杯で、毎日が楽しかった。人種の違う私を怖がることなく、彼らは私を一人の人間として迎え入れてくれたのである。

そんなある日、いつも通りみんなで校庭で遊んでいた日のこと、ある子供が口に石を入れて噛み砕き始めたのである。「だめだよ!」と英語で注意しても英語が通じない彼女は私を笑顔で見つめながら石を食べ続けていた。道に落ちた石を食べるという行為は閉塞や細菌や寄生虫による感染症を引き起こし、最悪の場合は死に至る可能性があるのだ。しかもそれを見たのは一度ではない。他の子も同じように地面に落ちて石、草、プラスチックやお菓子のゴミなど何でも食べてしまうのだ。これは正しい教育がされていないからなのだろうか、この問題の解決策を何日間か悩んでいた。

帰国日が迫った日のこと、彼女達の家を訪問することになった。そこで普段の生活の話聞かせてもらった。6畳ぐらいの家に5~9人で暮らしていて、一つのベッドにみんなで川の字になって寝るみたいだ。そして毎日使っている水も見せてもらった。おそらく川から汲んできた水の色は茶色で砂も混ざっていた。この水は洗濯、料理、そして飲み水としても使っているそうだ。あまりの衝撃でしばらくその現実を受け入れることができなかった。彼女達が当たり前のように石やゴミを食べること、茶色の水を飲

むということ、これは生きていくためにしなければならないことだったのだ。

私はこの経験から多くのことを考えさせられた。生きていくために仕方のないことでもそれは体にとって悪影響で、いずれ死につながってしまう可能性が高くなってしまふということ。どの道を選んででも最善策が見つからないこの問題に胸が締め付けられた。だが彼女達はいつも笑顔で学校を走り回り、毎日私に最高の笑顔を見せてくれた。そんな将来の希望に満ち溢れたまだ小さい子供達が、生まれ育った環境を理由に将来の道が狭まるという問題は、今すぐに解決しなければならない。

この問題から私は「教育」の重要性を強く感じた。教育が受けられない環境だと、将来職業を見つけることが一段と難しくなる。それは貧困の連鎖に繋がりが、食料を安定的に確保することも難しくなる。教育はただの知識の伝達だけでなく、未来を担う子供たちが自らの人生を切り開き、社会に貢献するための力を養う手段なのだ。そして、その教育を受ける機会が奪われることは、個人の成長のみならず、社会全体の進歩をも阻害する。だからこそすべての子供に教育を届け、社会システムの基盤から変革をもたらしていくことが重要なのだ。世界中には教育を受けられない子が沢山いて、その理由も様々である。戦争、環境、お金、それぞれが深刻な社会問題に悩まされ不自由な生活を送っている。地球規模の問題は一つの国や地域だけで解決できるものではない。だからこそ、地球市民としての意識を持ち、他者を尊重しながら共に未来を築いていかなければならないのである。未来の地球を守るために、私たちは今から行動を起こし、次世代により良い世界を引き継ぐための責任を果たさなければならない。それは決して難しいことではなく、小さな行動の積み重ねが、大きな変化を生む。教育を通じて可能性を広げ、持続可能な未来を実現するために、私たちが共に歩んでいきたい。



「幸せの連鎖」をつなぐ献金

〔神奈川県〕

横浜共立学園高等学校 1年 稲森 優衣

「教育が貧困を抜け出す唯一の道だよ」

これは、あるスリランカの少女が母親に言われた言葉だそう。この少女が生まれた家庭は貧しく、勉強したくても思うようにできなかったという。この少女は三人兄弟のうちの一人だったそうで、ノートを買う十分なお金もなく、一冊を三等分して使ったそう。

教育を受けることができないと、貧困は世代間で連鎖するそう。両親が、自分たちのようににはなつてほしくないと思っても、自分たちの仕事があるし、読み書きができなくて、子供に勉強を教えてあげられない。このような状況が、ある一定の地域ではめずらしくないという。これを、「貧困の連鎖」というらしい。つまり教育を受けられなければ貧困の連鎖から抜けられないのだ。

私が通う中高一貫校では、月に一度献金活動が行われている。その献金は、アジアの貧困地域を支援するもので、集められたお金は、その地域の子供たちの教育費用にあてられているそう。そのスリランカの少女も、この支援を受けていた。

私は中学校に入学してから毎月、少しではあるが、毎回欠かさず献金をさせていた。入学当初は私にもできることがあるのだと嬉しくて献金していたが、それに加え別の感情が生まれた。献金先の人々に対する感謝の気持ちだ。私には将来就きたい職業がある。だが、諦めようと思っていた。私の学力が足りなくて、なれるわけがないと決めつけていたからだ。

その時にふと、自分の情けなさに恥ずかしくなった。私は、学校に行けて、勉強しただけ勉強できる。この上ない贅沢な環境にいて、勉強をたくさんしたいと思う自分が嫌になってしまった。あとは自分が頑張ればいだけなのに、そんなことで諦めてしまうのか。それでは、献金先の方々に失礼だと思った。このままでは献金させていただく権利さえないと感じた。

私は高校生になって、夢を諦めないことを決めた。そのための勉強は、つらくないと言ったら嘘になる。それでも、達成できる喜びに比べたらどうってことない。そう思えるようになって、少しだけ、献金先の方々に恥ずかしくない自分になれた気がしている。また同時に、その方々の凄さを思い知り、より献金させていただきたいと思うようになった。

そのスリランカの少女はこの献金活動によって大学まで進学することができたそう。スリランカで大学に進学するのは小学校に入学する人のうち約6パーセントしかいないことから、彼女の努力は私にははかり知れないものだということがうかがえる。現在彼女は、スリランカの地域開発団体で、地域のために尽力し、家族にも快適な生活をもたらそうとしているという。つまり、彼女は貧困の連鎖から抜けつつあるということだ。それはまさに、その少女にとっての「未来の地球のためにできること」だと感じた。

私にとっての「未来の地球のためにできること」は二つあると考えている。一つ目は、遠い国にいる、夢に向かって懸命に努力するということでも素敵な人々に少しではあるが支援させていただくこと。もう一つは、私自身もその方々に献金させていただいている身として、夢に向かって頑張ることである。私は献金という形でその地域の方々に助けているが、その方々は私に夢を諦めない懸命な姿という形で勇気をくださり、助けていただいた。

これで「未来の地球のため」になるのかと思われてしまうかも知れないが、私はそうは思わない。現在のスリランカの少女のような救われた人が、苦しむ子供たちを救い、またその子供たちが大きくなって苦しむ子供たちを救い…ということが実現すれば、地球を変えるのは不可能ではないと思う。それはまさに、「幸せの連鎖」とも言えるのではないだろうか。そのためには、私たちの支援が必要不可欠なのだ。

「貧困の連鎖」ではなく、「幸せの連鎖」がひろがりますように。

カフェテリアの食器返却口には、見渡す限り、食べ残しがのった皿が溢れていた。今トレーを返しに来た人の皿にも食べかけのパンがのっている。あの人の皿にも。あの皿にも。そして私のお皿にも…。

昨年の夏にポストンへ語学研修へ行った。その際滞在した大学のカフェテリアでは、料理がずらりと並び、buffet形式で好きなだけ食べることができた。そこで見たのがたくさんの食べ残しだった。一緒に食べたアメリカの女子学生は、盛った料理が美味しくなかったから残すと躊躇いなく言い、まだ皿に半分以上も残っている料理に手をつけなかった。中国からの男子留学生も、食べきれないと残していた。私もそんな周りに流されてしまい、buffet形式にも関わらず食べ切れずに残してしまっ

た。帰国して振り返ってからの現状は異常だと気付いた。この経験を通して、私たち日本人を含む先進国では、食べ残しの習慣が当たり前の様に根付いていることを身に染みて感じた。

一方、学校で開かれた講演会で、深刻な食糧不足に喘ぐ人々がいることを知った。国際協力で尽力されている講師の方から経験などを伺った。最も印象に残っているのは、アフガニスタンについてのお話だ。

「アフガニスタンでは七割が飢餓に苦しんでいます。なぜだか分かりませんが、タリバンによる内政の不安が大きいと、皆さんは思うでしょう。しかし、最大の原因は地球温暖化なのです。干ばつによって自立的な農業ができないことが一番深刻なのです。」

途上国の貧しさは、工業化の遅れや紛争などの安定しない政治が原因だと思っていた私は、この事実を知って呆然とした。まさにポストンで体験した食べ残しのような、私たちの無責任で無意識な行動が温暖化を助長し、弱い立場にある人々の生活を悪化させているのだと気付いた。

これら二つの経験を通して、先進国と途上国の間の関係を知った私は、いてもたってもいられなくなった。私は今の自分にもできることを模索し、国連が主催するACTNOWというキャンペーンに参加することにした。アプリを使ってSDGsのために行ったアクションを記録する。すると、自分がどれだけ二酸化炭素や水の浪費を削減できたかを計算してくれる。私はシャワーを浴びる時間を五分も短縮できるようになった。車よりも公共交通機関や自転車を使うようになった。食品ロスを削減するためにおつとめ品を積極的に買うようになった。日常のあたり前の行動を少し改めるだけで地球環境は大きく変えることができるということを学んだ。

また、デジタル社会の中で、アプリを使うことで、日本にいながら世界規模の行動を起こせるということも学んだ。世界中にいるユーザーが励みになる。九月に行われる未来サミットに向けて集められたアクション数の中に自分が貢献していると実感できた。アプリには、自分を世界の一人として自覚させてくれるメリットもある。若者の得意分野であるAIやSNSは、国際問題解決の一つの糸口になり、今後益々広がっていくだろう。

日常の何気ない行動を少しだけ、しかし着実に変えていくことで、地球温暖化は解決できる。何も特別なものを用意しなくても、日本にいても、途上国のためにできることはたくさんある。

今後は、この活動をもっと周りの友達に勧めていきたい。アプリを通して、世界中のより多くの人が行動を起こすことが、解決の一步だと実感したからだ。

アメリカで一緒にご飯を食べた女子学生の言葉を思い出す。アプリを使い始めて一年近くたった今の私なら、自信と勇気を持って彼女に言うだろう。「一緒に最後まで食べよう」と。

猛暑の夏に飲む冷えたアイスコーヒーは最高だ。このコーヒーがそのうち飲めなくなるかもしれないという話を、私は近所のカフェの店長さんから聞いた。コーヒーは南北25度にある熱帯地方の国々が産地であり、その多くが発展途上国だ。そこで働くコーヒー生産者の一日の収入は、一ドルにも満たないという問題がある。それに加え地球温暖化による気候変動の影響で、気温・湿度の上昇や「さび病」の流行、干ばつにより産地が2050年には半減するという問題があるそうだ。コーヒーは気候変化に敏感で、実際に収穫減少や品質低下が起こっており、さらに近年では栽培に必要な肥料の値段が上昇し、途上国生産者の生活を圧迫して生産者の減少を招いているそうだ。それらが原因でコーヒー豆の国際価格が上がると、コーヒー業者のコストが増え、結果的に私達消費者に価格増をもたらす。このままだとコーヒーは超高級品になってしまい、簡単には飲めなくなってしまうかもしれない。これは私にとって一大事だ！コーヒーに関する問題のうち、何か自分に出来ることはないかと調べてみると、コーヒー生産の上流から下流の色々なところで、多くの対応策が国、民間、個人のレベルで実施されていることがわかった。

その中で私の目をひいたのが、「コンポスト(堆肥)」だ。生産者の家庭で出る生ごみ、栽培の過程で出るコーヒーの実や殻などの有機物を土と混ぜ、発酵・完熟するまでコンポスト内に置き、有機堆肥にして活用しているルワンダの例を見つけた。費用をかけずに簡単に有機肥料を作ることが出来るため、環境に優しく生産者の経済的負担も軽い。近年、化成肥料をまいた農地から発生する亜酸化窒素ガス(二酸化炭素の約三百倍の温室効果を持つ)が、オゾン層を破壊する原因の一つになっており化成肥料の使用が問題になっている。また、化成肥料の価格が上昇し続けていることを考えると、途上国のコーヒー生産地においてコンポストで作った自家製有機堆肥を使用することが、いかに現地の環境、生産者、経

済に優しいかがわかる。

そこで、私も自宅で生ごみをコンポストで堆肥にして資源として再生し、栽培に効果があるか試してみた。地元のクリーンセンターでコンポスト容器を貸してもらい生ごみ堆肥を作ってみたところ、七月二十日からの三週間でほぼ堆肥ができた。それを元気がなかったきゅうり二鉢のうち一鉢に施肥すると、八月下旬から大きい実がたくさんなり始めた。他方、堆肥しなかったもう一鉢のきゅうりには実がつかなかった。以上のことから、コンポスト堆肥は作物栽培に効果があり、誰でもできる手軽で有用な活動であるとわかった。

有機廃棄物を堆肥化し、その堆肥で作物を育て、更に育成中に出る有機廃棄物や残菜等をまた堆肥化する。このような持続可能な栽培と食の循環は、途上国に限らず先進国を含めた全ての国において必要な活動だと思う。限りある資源を有効活用し環境に配慮した持続可能な栽培は、そのまま人々の持続可能な生活へ繋がっていることを実感した。

コーヒーショップの店長さんが言うには、以前はコーヒー栽培ができなかった、また少量収穫しかできなかった緯度の高い場所にある途上国(ネパールなど)で、地球温暖化により近年コーヒー栽培が可能になったそうだ。それによって現地の人々の新たな収入源が増え、生活向上に繋がれることは良いことだと私は思う。しかし、現地の環境に配慮せずにコーヒー農地が乱開発されたり、大量の化成肥料が使われてしまったら？そのような見方を常に持ちながら、コーヒーを選ぶ時にはフェアトレード認証、レインフォレスト認証、バードフレンドリー認証等のものを選びたい。それは途上国の自然環境や現地労働者を守り、支援することになるからだ。私達の意識的な選択が、一杯のアイスコーヒーからよりよい未来までも守ることになるのだから。



世界市民の自覚

〔大阪府〕

学校法人創価学園関西創価高等学校 2年 新井 裕子

「平和って4種類あんの。」

これは、この夏、元JICA職員の方から教えていただいたことだ。この言葉に出合った時、私はその意味を考えた。初めは幸福度に関連することかと思っただけ、それは違っていた。1つ目は貧困や差別などの構造的暴力がない積極的平和が実現されている状態。2つ目は積極的平和に向かう途中の状態。3つ目は直接的な暴力がない消極的平和のみが存在している状態。4つ目は消極的平和すら存在しない状態であると述べられた。そのような概念に初めて触れ、私は興味深く思った。

その後、平和構築のプロセスを学んだ私は、「なぜ、私たちは同じ人間でありながら、宗教や民族が異なるだけで争ってしまうのでしょうか。」と問いかけた。すると「お互いのことを十分に理解していないからかな。生まれた場所や育った環境が異なると、どうしても偏見がでてしまう。他人から固定観念を植え付けられる場合もある。一人ひとりが他者を思いやる気持ちを持つことが必要なんだ。」と答えられた。私はその言葉に納得し、これを機に考えを巡らせた。例えば、暗闇は恐怖を生む。それは、そこに何があるのかが見えないことから生まれるのであるのだと思う。それはまさに、他の人種や文化に対する偏見が起こる原理と同じであり、その恐怖は「知らないこと」から生まれるのだと気づいた。

かつて私は、目以外をベールで覆ったムスリムの女性たちに対して、少し怖いと感じていた。しかし、シンガポールに滞在していた際、ムスリムの家族と関わる機会を得た。特に、私が急病で病院に運ばれた時、懸命に支えてくれたり、食事を共にしたり、心を開いて笑い合ったりしたことが忘れられない。その優しさを思い出す度に、心が温かくなる。私はその方々の人間性に触れ、偏見が完全に消え去った。

この経験から、知らないものを他人からの情報で判断するのではなく、自分の目で確かめ、自ら学ぶことが大切であると痛感した。そして、私

は様々な偏見をなくすために行動し始めた。その中で、どの国にいるとしても、人間としての本質は変わらないことを改めて感じた。良い人もいれば、そうでない人もいるが、それはその人の国籍とは無関係であり、心の状態に起因するものであると思った。

SDGsの目標16には、「平和と公正をすべての人に」とある。私たちは皆、地球に住む大家族であり、差別など絶対にあってはならない。しかし、今この瞬間も世界各地で戦争が続いており、飢餓や疫病などで死に追いやられている人々も後を絶たない。これらの問題は他人事ではなく、私たち全員が、世界市民として向き合わなければならないと感じている。人間は誰しもが尊い命を持っていることを常に意識し、平和を築いていきたい。

そのために、まずは身近にいる家族や周囲の人々に感謝や行動で示し、幸福にする努力をしている。有難いことに、私には人や国の不平等をなくそうと心を合わせ、活動してくれる友人がいる。私は今年、世界市民としての自覚を深めるクラブ活動を立ち上げ、45人の部員が集まってくれた。互いに語学力を磨き合い、海外在住者の実体験を学び、来日者に多言語で話しかけたりしながら異文化交流を促進している。自ら人々の輪に飛び込み、違いを認め、対話する勇気の一步が平和への道につながると強く信じている。

また私は、模擬国連の大会を通じて複雑な国際問題に取り組み、背景や立場の異なる大使と合意形成し、新たな条約を決議している。さらに、セーブザチルドレンの事務所や気候変動適応センター、在日韓国人資料館等を訪れ、自分の目で見て学んでいる。その中で、人のために行動する方々には共通点があることに気づいた。それは、輝く目、謙虚な態度、揺るぎない使命感である。私も、そのような人材になりたい。

そして、この地球上から争いや差別をなくすことに貢献するため、情熱を燃やして努力し続けていく決意だ。



平等から公平・公正へ

〔大阪府〕

大阪府立豊中高等学校 1年 徳山 颯介

二〇一五年九月の国連サミットで採択された持続可能な開発目標SDGsの十七の目標のうち、「平等」と入っている目標はいくつあるのか知っているだろうか。答えは五「ジェンダー平等を実現しよう」と十「人や国の不平等をなくそう」の二つである。私はこの「平等」という言葉に引っ掛かった。そもそも「平等」という言葉の意味を考えたことがあるだろうか。

実際に辞書で引いてみると、「差別することなく、同じように扱うこと。」と載っており、記事には「偏り・差別がなくそれぞれの特性や能力を全く考慮しないこと。」と載っていた。つまり、平等 (equality) はそれぞれを「ゼロ」にして同じにするという意味であると解釈することができる。これは現代の平等とは異なる。例えば男女平等では、意味を遵守するのであれば、「女性も男性と同じく、土木関係等の力仕事もするべきだ。」という意見が出るだろう。しかし現代社会ではこれは平等ではないと言い、意味との矛盾を発生させている。また、人種差別問題がなくならないのはこの矛盾を抱えた平等、又は見せかけの平等が原因であると考えられる。

私が未来の地球・社会に必要なものだと考えるのは、公平・公正 (fairness) だ。公平や公正は平等に対して、「特性や能力を考慮した上で同等に扱うこと。」といった意味を持っている。この考え方では、完全な「イコール」にはできないが、「ニアリーイコール」にすることができる。しかし、公平には「かたよっていない」という意味に対して、公正は「正しい、法や道義に反しない」という意味があり、少しニュアンスが異なるため、場合によって使い分けなければ先程述べたことを実現することができない。人種差別問題は「公正」という考え方が特に大切になってくる。なぜなら、「公平」という考え方では、例えば「白人が黒人を差別するならば黒

人も白人を差別してもいい」ということになる。これでは差別がなくなるところか増えてしまう。では、「公正」の考え方ではどうなるか。「差別は法や道義に反する」と考えられるため、この問題の解決策の一つとなる可能性を秘めている。もちろん、公正よりも公平の考え方が有効なものも存在している。例えば、選挙は一人一票とたたよっていない公平の考え方が重要となる。このように公平と公正はそれぞれの良さを生かしてこそ未来をより良いものにするのができるかと私は考える。

平等、公平、公正の三つの考えに共通することは差別をなくさなければ実現しないということだ。では、日本では差別はどのような現状なのだろうか、人種差別を例に挙げてみる。「日本では人種差別はあまり起きていない。」と主張する人がいるが、どうだろうか。日本人は外国人を恐れていないか。外見が違うからや自分は英語が話せないからなどの理由で外国人を無意識のうちに避けていないだろうか。実は人種差別には明確な定義がないため、これらも人種差別と捉えられてしまうこともある。だから日本人はこの恐怖心無くしていくことが日本での差別を無くし、公平・公正を実現するための鍵となっていこう。私たちにできることは、留学生と英語力に関わらず、積極的に話しかけに行くことや英語で道を聞かれても返事をしてあげることなどがあると考える。不器用でも誠実に対応することが何よりも大切である。

現代社会では、平等に限界が来ている。それを解決するためには、公平・公正の考え方を取り入れていくべきだと考える。そして公平・公正の実現のためには、一人一人、一国一國が差別を解決しよう意識する必要がある。公平・公正が実現すると地球の未来は曇るだろう。

私の家のトイレには、月替りのカレンダーが飾られている。青年海外協力隊鳥取県OV会に所属する父宛に毎年届くJICAの壁掛けカレンダーである。被写体は果物にかぶりつく子供や働く女性たち、学校の集合写真などさまざま。私はこのカレンダーを見るたび、日常の隙間に、少しの間だけ世界へ思いを馳せる。

前述の通り、私の父は青年海外協力隊員としてアフリカに派遣されたことがある。その影響で、私は幼い頃から世界に対する関心が強かったように思う。JICAの帰国報告会などにも数回行ったことがある。だが、この人たちが世界の課題を解決するために動いているということとちゃんと理解したのはずっと最近である。

父は私に様々なイベントへの参加を勧めてきた。その中で一番印象に残っていることは、去年一昨年に参加した海の日の海岸清掃活動である。今年は雨天中止になってしまった。場所は鳥取県米子市淀江町。軍手を付けて、砂の中に隠れたゴミを探る。参加して実感するのは、海を取り巻く環境の悪化は思った以上に深刻だということだ。少しがむと、前の利用者が残っていた軟質プラスチック製の袋や流れ着いてきた発泡スチロールの欠片、挙げ句の果てにはタバコの吸い殻など様々なゴミが落ちている。利用者が少ない海岸でこうなのだから、ひどいところはどのような景色が広がっているのだろうか。ゴミを回収する立場になって初めてその恐ろしさに慄く。これがひと度波に飲まれ海中に漂ったとき、海洋プラスチックとなり、海の生態系を蝕む牙となる。環境省によると、毎年約800万トンのプラスチックが海洋に流出しており、事態は一刻と深刻さを増している。海は世界との共有物であり、人間は皆これを自覚する必要がある。また、「地球は子孫から借りているもの」というネイティブ・アメリカン

に伝わる名言がある。つまり、海は未来との共有物でもあるのだ。私達がこの短期間で海をここまで汚してしまったことは未来に対する裏切りである。こんな世界的な課題がこの地球には山積している。

では途方もない課題の数々を前にして私達にできることは何なのか。2つ挙げたいと思う。1つ目は、多くの人に世界に触れる糸口を与えることだ。海岸清掃しかり、最初のカレンダーしかり、私は幼少期から、たくさん世界に関わりやすい、あるいは関心を持ちやすい環境で生きてきた。逆を言えば、この環境で生きていかなかったら世界への関心なんておそらく今の半分もないだろう。つまり、多くの人が世界の諸問題に対して関心を持つ糸口に気がつかないまま大きくなってしまったのである。まずは関心を持ってもらうところから始めなければならない。例えば、私は一昨年の海岸清掃活動にクラスメイトと中学の同窓生を広く誘った。あまり話したことがなかったクラスメイトが1人参加してくれた。このように、微力でも自分にできる限りのアピールをすることは有効であると信じている。2つ目は世界の人と関わる機会を持つことだ。一昨年の海岸清掃活動には、鳥取県に留学中だったフィリピン人の高校生も参加していた。話しかけて仲良くなり、今はSNSでつながっている。また、町の取り組みに岡山大学の留学生が参加するときのアシスタントも行った。様々な国の大学生が環境問題について話し合っており、中では国ごとに意見が分かれたりして面白かった。違う世界に生きた人を見ない限り、なかなか自分の常識から逃れることはできない。他の国の人と関わることでより一層世界に興味を湧かせる。これは具体的行動の原動力となる。

ちっぽけな私達ができることは所詮限られている。だが、地球のために、その「限られている」ことを精一杯やっていきたいと思う。

「まだ使えるでしょ？」「まだ家に残ってるよ」

これは買い物をするときに、私の母がよく口にする言葉だ。私は小さい頃から興味をそそる物を欲しがれる性格で、よくあれこれと母にねだっていた。父も私と似ており、一緒に100円ショップへ行って、その商品がいいなと思えばすぐを買ってしまう。だが母だけは違っており、新しい物よりも、今あるものを大切にしていた。例えば、服は最低3年、靴は2年、鞆は5年。そんなふうには、十分使わない限り、あまり新しいものを買おうとはしない。家族で買い物に行くと、私と父で母に服や雑貨を提案し、却下されることがよくある。私はこれまで「少しくらい物が増えても問題ないだろう」と思っていたが、初めての引越しを経験したとき、今までの私の考え方が環境問題に繋がってしまうのかもしれないと気づいた。

引越しをするときに断捨離をしたのだが、捨てられた物の量に衝撃を受けたことを今でも覚えている。捨てられた物の多くはあまり使われなかった雑貨や服、そして家具だ。使い古され使えなくなった物を捨てるのは当然のことかもしれないが、まだ使えるものを捨ててしまうのは少し悲しかった。しかし、断捨離によって家に必要な物、不要な物を全て可視化することができた。その結果気づいたことは、私が捨てた不要物の多くは、そのときの好奇心を満たすために買った物であったということだ。

家にある物の量は人それぞれだが、普段使わない物がいくつあるという人も多いのではないだろうか。私がおもな物がなくなる原因として考えるのは、魅力的な商品の豊富さ、安価な店の増加、そして現代の流通の発達だ。商業の発展に伴い、多くの企業が同じような商品を作るようになり、競争が激化している。その結果、商品の質は磨かれ、より派手で心惹かれる広告は増え、多くの人が直感的に「欲しい」と思う商品が大量に生産されていった。これらの商品がデパートやスーパーに大量に並べら

れ、さらにネットショッピングなどで簡単に手に入れることができるようになり、私達が「欲しい」と感じる機会も増えた。また、安価なショップで機能的で斬新な商品が安く買えることも、衝動買いの原因の一つとなっているように思う。このように必要ではなくても、その場の自分の好奇心を満たす目的で安く気軽に買ってしまい、その結果ほとんど使わず放置されていることが多いのではないだろうか。

世界において廃棄物の量は、年々増加傾向にある。現在なんと毎年約21億トンものごみが廃棄されている。もちろん人口が増えているのだから、ごみも必然的に増えるのかもしれない。しかし、各家庭でごみを減らす意識を持つことで、全体の廃棄物の量を減らすことができるのではないと思う。食品であれば賞味期限をよく見て食べ残しをしない、物であれば必要以上に買すぎないなど、解決のための方法は今までたくさん考えられてきた。あとはみんなの意識だ。今、物を簡単に買える世の中で、みんなが一步踏みとどまって、目の前にある魅力的な商品が「本当に必要かどうか」を考えることができる意識を持つことができれば、悲しくも使われず捨てられる物は減っていく。断捨離は1つの例に過ぎないが、一度家に何が残っているのか、どれだけ不要なものがあるのかを可視化させることは重要だ。いらぬ物が多ければ、買いたい物をするときにもその物が必要かどうかをより意識するべきだろう。すべての人にミニマリストになれと言っているわけではない。ただ、衝動買いの末路がゴミ箱の中となるならば、結果的に世界のごみは増えてしまうのだ。だからこそすべての人に、自分の欲だけに従わず、「本当に必要か」「まだ同じ物が家にある」「まだ使える」という意識を持って過ごしてほしい。私たちが買い物で一步踏みとどまって考えることで、ゆくゆくは世界が抱えるごみ問題を改善できると私は信じている。



私たちの地球を変えるには

〔福岡県〕

福岡県立修猷館高等学校 2年 國永 理緒

昨年十二月、私たちは今年三月に行う文化祭で「ピタゴミスイッチ」という企画をクラスで行うことが決定した。その企画は「実際に自分たちが海岸でゴミを拾ってきてその拾ったゴミをピタゴラスイッチにする」という内容のものだった。私たちは多くのゴミが流れているという志賀島付近まで行き、そこで企画に使うゴミを拾うことになった。

実際に海岸を見ると、そこには想像をはるかに超えた衝撃の光景が広がっていた。あたりには大量のプラスチックゴミや食品パッケージのゴミ、漁業の浮きなど様々なゴミが広がっていた。塩の匂いに混じったゴミの悪臭もする……私たちは言葉を失った。いつも遊びに行くようなももち浜みたいに綺麗な海ではない。そこには日本語のゴミだけではなく、韓国語や中国語、英語、アラビア語など色々な国のゴミがあった。段ボールや服、長靴なんかもある……これが本当の世界の現状なのだ。私たちはこの現状を何も知らなかった。

文化祭当日で私たちは、この様子を模造紙にまとめたものを掲示したり、実際に拾ったゴミで作った「ピタゴミスイッチ」を披露したりして観客に地球の現状を伝えた。「私たちの住む地球は今こんな状況なんだ。こんなに多くのゴミが溜まっている。これは解決しなければいけない問題だ。私たちにできることはマイボトルを持ち歩いてペットボトルを買わない、レジ袋ではなくマイバックを持つなど環境に配慮した行動を取るのが良い。」と具体的な解決策まで示した。

しかし数ヶ月経った今、私は平然とペットボトルの飲料を購入していた。あんなに地球の現状に衝撃を受け、みんなの前で発表したのにもかかわらず、私は文化祭のことなどすっかり忘れて過ごしていた。このことに気づいた時に私はハッとした。あんな風に発表したり、気をつけようと思ったのに何も考えられていない自分がある……

何か問題があるから具体的に何ができるかを考え、人に伝えることは

簡単である。そしてそれを意識しているうちは行動をとることも私たちはできる。だが、数ヶ月経つと私たちは全て忘れ、地球のことなど考えない生活に戻っている。これでは私たちの地球は変わらないどころか、もっと悪い状態になるかもしれない。

結局は私たちに危機感がなすすぎるのが良くないのだと思う。普段の生活におびえ過ぎるのも良くないが、危機感をもっと持つことができれば、より考えて行動を取ることができるはずである。

しかし、前提としてまず私たちは今の地球がどうなっているのかを「知る」必要がある。何も知らないで過ごしている、今危機に瀕している地球をとり戻すことはできない。「知る」方法は色々ある。現代ではインターネットを使えば一瞬で知りたいことを見つけることができるだろう。私のように実際に現状を目で見て体感するのも良いかもしれない。

そして「知る」ことができたならば、友人もしくは家族、先生と「今どのような問題があるのか、なぜそのような問題が起こっているのか」など「知った」ことに関して少しでも話す時間を作ってみよう。私も友達と将来のことを考える時に「地球がいつ滅びてしまうのか」とヒヤヒヤしながら考えを話すことがある。人と話したら自分では気づかなかった新しい視点から事柄を見つめ直すことができる。

私たち若者はこれからの社会、地球をつくる。私たち皆が少しでも地球の現状について知り、考えることができれば、地球を救うことができるはずだ。

少しだけでいい。「今日世界環境デーらしいよ。」とか、「この前の文化祭で見たゴミって実は船からのゴミらしいよ。」とか難しいことじゃなくてもいい。まずは今、隣にいる人と地球について考える時間をつくってみよう。



継続は力なり

〔沖縄県〕

昭和薬科大学附属高等学校 1年 野口 雛愛

私は、SDGsについて中学生の時から学び、課題を見つけ、私たちに何ができるかを考えてきました。現在私たちが暮らしている世界には貧困、紛争、気候変動、感染症などの数多くの課題があります。人類が安定して暮らしかつ続けられる可能性があまり高くなく、世界中のさまざまな立場の人々が話し合い、課題を整理し、解決方法を考え、立てた2030年までに達成すべき具体的な目標を「持続可能な開発目標＝SDGs」と言います。2015年の国連総会で採択されたSDGsには17の目標・169のターゲットが示されています。私はその中で目標13について考えました。目標13「気候変動に具体的な対策を」。世界中では気候変動が起こっており、過去30年間の日本の熱帯夜の平均日数は、1910年からの30年間の平均の約2.8倍になっているとされています。他にも1945～2020年の75年間、特に台風やハリケーン、サイクロン、洪水や干ばつなどの気候に関連した災害発生回数が増えているとされています。2020年、台風やハリケーン、サイクロンが起きた回数は、過去20年間の平均と比べて26%、洪水が起きた回数は23%、洪水によって命を落とす人の数は18%増えたと言われています。このような災害の多くは連続して発生し、復興のための十分な時間もなく、食料不足や経済状況の悪化につながり、人道危機を引き起こしてしまいます。気候変動で起こることを少しでも防ぐためには、環境負荷を減らしていけばいいということを学んだので、自分たちでできる対策を普段から心がけていかなければならないと思いました。

私が行っている対策は三つあります。

一つ目は、節電・節水です。例えば、照明やテレビの電源をつけたままにしないことや、洗い物や入浴のときに水を出したままにしないこと、家電や照明を買い替えるときには、省エネの商品を選ぶことです。社会全体

の消費電力を少なくするためには、節電・節水が大事であると気づき、家族で取り組むようにしています。

二つ目は、ゴミを減らすことです。最近、あるファストフード店では、使わなくなった自社のおもちゃを持っている人が任意で回収ボックスに入れ、店がそのおもちゃをリサイクルし、トレーにかえて再利用するという取り組みを行っています。私は、使わなくなったおもちゃを店の回収ボックスに入れ、その店で実施されている取り組みに参加しました。

三つ目は、車での移動を減らすことです。国土交通省の資料によると、自家用車が一人一人を1キロメートル運ぶときの二酸化炭素の排出量は133グラム、バスはその半分以下の54グラムとなっています。このことから、外出時の移動手段を自家用車から公共交通機関、自転車、徒歩に変えることで、二酸化炭素の排出量を抑制することができます。私は、移動距離の短いモノレールや自転車、徒歩で移動し、二酸化炭素の排出量を少なくできるように心がけています。

このように、自分ができることを普段から行うようにしています。私が取り組んでいることとして挙げた二つ目のゴミを減らすことは、私だけでなく企業も行っています。今日、問題として挙げられている気候変動は、社会全体で取り組んでいかなければなりません。すぐに気候変動の問題が解決するということはとても難しいので、一人ひとりが対策を立て、その対策を行い、少しずつ積み重ねて改善に向かっていくことが大切だと思います。

「継続は力なり」

世界全体、社会全体で協力してこの問題が解決することを、私は願います。

地球の未来のために、私たちができることは— JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト2024表彰式開催

次世代を担う中学生・高校生が世界の問題・課題を知り、日本とのつながりについて理解を深め、どのように行動していくべきかを考える、JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト。2024年度は、「未来の地球のために～私たちができること～」のテーマで募集し、中学生の部16,526作品、高校生の部19,676作品、総計36,202作品の応募がありました。「未来のために」という大きなテーマを前に、未来を担う中学生・高校生がグローバルな視点を持ち世界に向けて踏み出した一歩を綴りました。その中から、中学生・高校生合わせて40名の受賞者を対象に、2025年2月15日、東京・市ヶ谷のJICA地球ひろばで表彰式を行いました。



身近な世界での課題発見、それが国際協力へと続く

JICA理事長の田中明彦は、受賞者に向け、国際社会と日本のつながりについて、「地球規模で起きている課題」と「多文化共生」という二つの側面に関心を持って欲しいと伝えました。身の回りのことから日本のこと、そして日本にいながら世界のことを「自分ごと」としてとらえる発想、姿勢を持ち続けてほしいとメッセージを送りました。

中学生の部の審査員長である尾木直樹さんは、一人一人の思いが詰まったエッセイを読んで、未来の地球のためにできることに一生懸命に取り組んでいる姿が伝わったこと、また、国際連合の子どもの権利条約において地球環境に関する提言の許可を求める文書があることに触れ、若い力が世界を救う可能性があるかと述べました。この一歩を糧に今後の発展につなげてほしいと、受賞者や若者への期待を伝えました。



高校生の部の審査員長である星野知子さんは、審査の過程で、活動内容やエッセイの構成などの点数として評価できるもの以外にも「エッセイを書いた人に会いたい」という想いで評価している自分に気づいたと話しました。また、「これからの人生で、自分の書いた作品からたくさんの想いを受け取ってほしい。挫折したときに、自分が一生懸命書いたエッセイに励まされるはず」と受賞者へエールを送りました。

世界の課題を自分ごととして考える

受賞者を代表し、中学生の部、高校生の部で、それぞれ独立行政法人国際協力機構理事長賞を受賞したファウラー姫瑠さん(学校法人明治学園 明治学園中学校・3年)、飯田夕和さん(愛媛大学附属高等学校・3年)が受賞の言葉を述べました。

ファウラー姫瑠さんは、未来の地球のためにできることを模索した中で、誰もが特別なことではなく小さなことでも行動に起こし自分ごとにとらえることで、世界をよりよくできることに気が付いたと述べました。そして世界の課題は遠い話ではなく、一人一人が自分ごととして意識を持つことが大切であると強調し、足りない部分を補い合う社会を作っていきたいと語りました。



飯田夕和さんは、モザンビークを訪れた経験をもとにエッセイを書いたこと、そして教育が未来を切り開くカギであると語りました。モザンビークの経験で、何一つとして当たり前ではないことを知り、自身が多くの人に支えられて生きていることに気が付いたと述べました。また、多くの人と経験や感情を共有し今後も愛をもって人と接していきたいという思いや、教育によって子どもたちの可能性を広げるという夢を熱く語りました。

座談会・ワークショップを開催！

表彰式後、審査員・来賓の方々との座談会や、難民の避難を疑似体験するゲーム、国際理解ワークショップを実施しました。

座談会では受賞者から審査員へ、一人一人のエッセイの内容に関する質問や、これまでの活動の中で生まれた疑問、進路に思い悩む世代だからこそその質問が投げかけられました。普段話す機会のない様々な業種の方からたくさんのお話を伺って、座談会後にはとても明るく、次のステップに進む前向きな表情が見受けられました。

次に、「あなたがもし難民になったら」をテーマにした難民の避難を疑似体験するカードゲームが行われました。「災害時の対策は学校で行ったことがあるが、難民になった場合どのようにして逃げたいのかかわらなかつた」「ほかの人がどのように避難したかなどをもっと詳しく知りたい」など、口々に話していました。このゲームで避難を追体験することにより、難民に対する問題意識が高まった様子うかがえました。

続いて、JICA海外協力隊としてエクアドルで活動したスタッフの話をもとに、同国が直面する課題とその解決策についてグループごとに考えるワークショップが行われました。現地の課題には紛争、難民の受け入れや教育の機会不足などが挙げられ、解決策には募金やフェアトレード教育などが挙げられました。遠い国のように感じられたエクアドルでしたが、その国の問題を自分ごとで捉えることで参加者にも新たな視点が生まれた様子でした。

今回の座談会とゲーム・ワークショップを通じて、参加者は開発途上国の現状を学び、国際協力の多様な可能性について考えました。遠いようで身近な世界中に存在する問題解決のために、自身で考え、気付き、行動し、その想いを語る、その背中には大きく明るい未来が広がっていました。



おわりに

JICAエッセイコンテスト受賞者の皆様、改めておめでとうございます。そして参加して下さったすべての皆様、心から感謝いたします。2025年度のエッセイコンテストは募集テーマを「世界の幸せのために私たちができること～未来へつなげるために～」とし、2025年6月頃の募集開始を予定しています。沢山の応募お待ちしております。

学校での取り組みの紹介

新しい地球の未来のために私たちができること

学校応募校(中学校434校・高校230校)を代表して、
学校賞を受賞した学校よりエッセイコンテストの応募につながった取り組みをご紹介します。



高校生の部

川崎市立橋高等学校・国際科の取り組みとJICAエッセイコンテスト

川崎市立橋高等学校 国際科担当教諭 **都築 健一郎**

川崎市立橋高校国際科の理念は、豊かな国際感覚と視野を養い、国際社会に寄与できる人間を育成することであり、「平和を希求する国際人の育成」「課題解決能力の育成」「コミュニケーション能力の向上」の3つを目標としている。それらの目標を達成するために国際社会で活躍できる実践的な英語力と異文化コミュニケーション力を高めることを主眼としている。これらの2つの力を伸ばすため、様々な取り組みを行っているがその中でも途上国理解プログラムは国際科のカリキュラムの大きな柱である。途上国理解に関する講演会、授業、ワークショップ、国際協力機関

訪問等、様々なプログラムを通して、途上国の現状について正しく理解を深めていく。そして、これらの学習や体験を経て、日本が、更には自分が何をすべきかを主体的に考え、実践する力の養成を目的としている。

世界の大半を占めている途上国の抱える課題や関わり方を学ぶことは、今後の国際社会を生きていく上で必要であり、国際科が目標に掲げている「平和を希求する国際人の育成」「課題解決能力の育成」の実現のためにも欠かすことのできないプログラムである。

途上国理解プログラム

プログラム名	内容と目的
国際理解講演会	途上国支援に携わる人や団体の話を聞き、国際社会の一員としての役割について考える。講演会は1年間に2回実施し、医療、芸能、教育、スポーツ、環境、学生・市民活動をテーマに講演内容を検討している。
JICA海外研修員との交流学習	途上国に住む方との交流を通して、途上国が抱える課題や現状について正しく理解を深め、日本や個人ができることについて考える。
「貿易ゲーム」貿易格差について考えるワークショップ	世界に存在する不公平な貿易と格差について体験的に学ぶ。その中で国際協力の必要性を理解し、方法や行動の在り方について考える。(東京外国語大学との高大連携事業)
「多文化共生」について考えるワークショップ	異なる文化間のギャップやジレンマに苦しむ外国人や難民が抱える問題を知り、高校生として何ができるのかを考える。(東京外国語大学との高大連携事業)
ミャンマーペンパル事業	ミャンマーの高校生との文通を通して、途上国について共感的に理解を深める。また国際支援の在り方についても理解を深める。(明治学院大学との高大連携事業)
国際理解のためのスペシャルウィーク	国際協力機関訪問、国際支援に関する講義やワークショップ等を1週間の集中プログラムにまとめ、普通科の修学旅行期間に合わせて10月に実施している。主に、WFP(世界食糧計画)、JICA横浜、JICA地球ひろば、ユニセフハウス、Tokyo Global Gateway、東京ジャーミイ等に訪問している。



東京外国語大学国際理解教育サークルくらふとによるワークショップ「貿易ゲーム」



JICA研修員とのオンライン交流



NGOゴスペル広場による国際理解講演会

JICAエッセイコンテストは、題材が本校の途上国理解プログラムの内容と関連しているため、生徒たちがそこで学び体験したことを基に複合的に自分の意見をアウトプットする非常に良い機会である。実際にエッセイに取り組むこ

とによって国際協力に対する関心が深まり、自らできることを考える良いきっかけになる生徒が数多くいる。今後も国際社会の中で生徒たち一人ひとりがどのように行動すべきか考える機会として、参加させていただきたい。



中学生の部

JICAエッセイコンテストを通して、生徒たちの考えを日本中へ

豊明市立豊明中学校 英語科 国際理解教育担当 教諭 河村 知里

本校は外国にルーツをもつ生徒が多く、普段の学校生活を通してさまざまな文化と触れ合うことができます。毎日外国にルーツをもつ仲間と関わる中で、他文化や他言語に対しても寛容な生徒がとても多いです。そんな生徒たちに以下のような国際理解教育を通して、将来世界を動かす中心として活躍できる力を育てています。

総合的な学習の時間では、「私たちの生活と世界との繋がり - モノを通して考える持続可能な社会 -」をテーマとして、世界と自分たちの繋がりについて学習しています。外国に繋がりのある生徒は多いですが、日頃食べている物や日用品が外国と繋がっているという意識は低いため、この学習を通して「世界と繋がっている中で生活している」ということを学んでいます。また、私がJICAの教師海外研修でネパールに行ったこと、ネパールの人が愛知県の外国人住民の14.5%を占めているということ、多くのカレー屋ではネパールの人が働いていることを踏まえて、ネパールとの繋がりについても学習してきました。

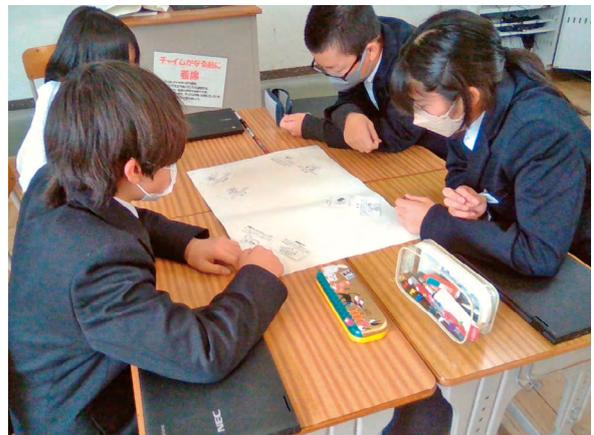
特別活動では、JICAの「出前講座」や「地球ひろば見学」を行いました。キャリア教育の一環として「職業人の

話を聞く会」でJICA職員の方をお招きし、開発途上国への支援を通して、日本も困ったときに助けてもらっていることを学び、生徒達は実は相互に助け合っていることを学びました。また、社会見学で地球ひろば見学を行い、楽しくSDGsや国際支援について学びました。

以上の取組を通して、生徒達からは、学んだことだけではなく、学んだことを通して何をしていきたいかなどさまざまな感想が出てきました。生徒たちが考えていることを学校の中だけに留まらせるのではなく、学校外にも発信していくことで、これからの社会を築いていく力として自信をもつことができるのではと思い、夏休みの課題としてJICAエッセイコンテストに学校全体として取り組みました。自分の考えを表現することが苦手な生徒向けに「エッセイの書き方ワークシート」を配付し活用させることで、どの生徒も自分の考えをまとめ、上手に表現することができました。今後もこの取組を継続していくことで、持続可能な社会を築く中心となっていく生徒を育て続けたいと思います。



1年生名古屋市分散学習でJICA中部を訪れた様子



授業で「世界との繋がり」について話し合っている様子



世界との繋がりやネパールとの農業面での共通点などを考える授業風景



職業人の話を聞く会でJICA職員さんから国際支援について話を聞いている様子



2019～2023年度受賞者 海外研修報告

2019～2023年度のJICAエッセイコンテスト受賞者（最優秀賞、優秀賞）13名は、夏休みを利用して海外研修に参加しました。本研修は開発途上国の人々の暮らしと文化、現場が抱える課題とそれらに対するJICAの取り組み等の視察・体験を通して、国際理解を深めることを目的としており、参加者は約一週間フィリピンを訪問しました。

フィリピンの人々の生活に触れ、また交流する中で、日本では知ることのできない途上国とそこに暮らす人々の想いを感じ、参加者一人ひとりが「世界と自分とのつながり」や「国際協力」について考える機会となりました。

研修を通して感じたこと・考えたことを多くの方にも知らせようと、参加者たちに報告書とフォトエッセイを書いてもらいましたので、以下、一部ご紹介します。



①JICA事務所訪問

穏やかな風に吹かれ、心地よい朝日に包まれながらバスで移動し、私たちはまずJICAフィリピン事務所を訪問しました。

私がお食事を一緒にさせていただいた職員の皆様は、現在フィリピン内にて紛争が起こっているミンダナオという地域で紛争解決にご尽力されており、内部で何が起きたのか、終結に向かうまでの痛ましい犠牲の数々、葛藤、その実体験をお話していただきました。平和が如何に脆弱で、尊きものなのか、改めて実感できる素晴らしい機会となりました。

JICAの海外支援と一口に言っても、多種多様な方法があり、援助手法にも、主に技術協力、有償資金協力、無償資金協力の三つがあることも、同時に知りました。

JICA事務所の皆様は、そこで、「有償資金協力の有効性」についてお話ししてくださいました。JICAの経済支援は、無償資金協力のよさに、返済義務がなくボランティアや慈善活動と似通った認識を持っていましたが、一方的な支援が必ずしも最適な選択とは限らない、と仰っていたのが深く印象に残っています。有償資金協力は、無償資金協力と比較して大規模な支援を行いやすく、また、途上国に返済義務を課すことで自助努力を促す効果を持ち、長期的な目で見ると、経済発展の効果をももたらすようです。国際協力に関する、新たな視点を得ることができ、大変有意義な時間となりました。JICAフィリピン事務所の皆様、ありがとうございました。



②NPOアイキャン訪問

設立30周年を迎えるアイキャンは、一人ひとりの「できること」を持ち寄り、貧困や災害による影響を受けた子どもの能力向上や地域の環境改善に取り組んでいます。

午前中は大通りや市場にいたストリートチルドレンと手を繋ぎながら一緒にアイキャンの集会所に向かって、歌やゲームでの交流、午後は児童養護施設「子どもの家」「Kalye Cafe」を訪問し、アイキャンヒストリーや職業訓練事業のお話を聞きました。

集会所で、明日家の立ち退きを迫られているという12歳の男の子、妊娠している15歳の女の子を目の前にし、「自分にできること」「幸せの形」について真剣に考えました。無戸籍で公的なサポートを受けられない子供達もいる現状を知り、海外を含めた草の根支援の必要性を肌で感じました。



③防災サイト訪問

フィリピンのマニラは平野で大きな川が流れていて、多くの人口が集中して住んでいます。台風の多発するこの地域は常に治水上のリスクにさらされており、その課題を克服するために、日本から技術者が派遣され、フィリピンの技術者と協力して対策を進めています。この度、その現場であるEFCOS (Effective Flood Control Operation System) パッシング・マリキナ川河川改修事業フェーズ4を見学する機会に恵まれました。

私が住んでいる大阪には淀川が流れていて昔から何度も洪水を繰り返しており、長い間たくさんの方が治水に心を砕き、堤防づくりに尽力してきました。そういう日本の経験や技術がフィリピンで活かされていると知り、私はとてもうれしく感じました。また、堤防のような構造物だけでなく、川にゴミを捨てないように地元の住民に呼びかけたりと環境を守るという考えも伝えようとしている点が素晴らしいと思いました。

それから、日本の技術者とフィリピンの技術者の方たちは、クリスマスパーティを開いたり、バドミントンを楽しんだりと非常に仲が良いというお話も聞きました。防災サイトを訪れる前は、技術協力と聞き、ちょっと難しそうなかたい雰囲気勝手に想像していましたが、実際には気持ちが温くなるような素敵な場所でした。彼らが築いているのは堤防だけではなく、両国の信頼関係と明るい未来なのだと思います。



④ナショナル大学ボランティアサークル交流

ボランティアサークルでは大学生と2人で1組のペアになって、大学の周りの道路を掃除しました。年齢が異なる学生が多く、住んでいる国が日本をはじめUAE、アメリカと多岐に渡る私たちは英語を通じて彼らと積極的にコミュニケーションをとりました。特に、事前に準備してきた計4曲の歌や踊りを私たちが披露した際、親睦を深めることができたと考えています。軽食時にはフィリピンの伝統料理をいただき、短い時間でも貴重な文化交流の経験ができました。



⑤JICA海外協力隊活動サイト訪問

車でマニラから2時間かけてバタンガス州のクエンカを訪れました。市長と副市長から、州の特産品であるバラココーヒーとクッキーのおもてなしを受けた後、野菜栽培と防災・災害対策の活動をしている2人のJICA海外協力隊にお会いしました。午前は、フィリピンのローカル交通手段であるトライシクルに乗って移動し、協力隊の方が野菜を栽培しているビニールハウスを見学しました。午後は、防災対策の一環である防災教育のために現地の小学校を訪問し、活動に参加させていただきました。協力隊の活動を間近に見る貴重な体験になりました。また、お二人の経歴も興味深いもので、何歳になってもバイタリティーを持って生きていきたいと感じた1日でした。



⑥ナショナル大学シニアスクール学校交流

ナショナル大学附属の高校に通っている学生と交流しました。まず、校内案内をして頂きました。キリスト教徒が多いこともあり、校内に綺麗なチャペルがありました。

案内後は、パンシットというフィリピンの焼きそばを頂き、主に英語で交流を深めました。私は、現地の文化や学校生活について質問をしました。フィリピンでは、自身の就きたい仕事によって、高校で履修する授業が変わるということを知り、将来についてより深く考えられるようなシステムが作られているのだと感じました。英語習得率が高いことにも感心しました。



⑦報告会(JICAフィリピン事務所)

長いようで短かった一週間。その成果を、お世話になったみなさんや保護者に発表する場ということで、一週間で一番ドキドキ緊張しながらJICAフィリピン事務所に入りました。みんな同じ研修を過ごしながら、感じたこと、印象に残ったことは13人13色。一人ひとりが自分の人生や普段の生活に落とし込みながら、自分だけの体験を語りました。みんなの言葉で、この一週間の出来事が次々と目の前に浮かび上がってきました。振り返れば、今までのどんな時にも負けないほど濃い時間でした。フィリピンのストリートチルドレンや大学生との異文化交流。実際に現場で働く方々との対話。人間の心の温かさに触れ、仲間と最高の絆を紡いだことを改めて認識し、もうすぐフィリピンを発たなければならないという何とも名残惜しい気分を胸をぐっと掴まれました。

自分には何ができるか悩み、人々にとって何が幸せなのか迷う。明確な答えは出ないまま、それでも自分の「心」で考え行動しようとして進む勇気をもった一週間でした。



彼らが教えてくれたこと

2023年度 中学生の部 最優秀賞 高嶋 凜乃



サイズの合っていない服に、靴をはいていないためか割れた爪。

決して裕福な生活をしているとは思えないストリートチルドレンの子どもたち。

JICAの研修を通して出会った彼らは、私が想像していたよりも遥かに、毎日を彼らなりに必死に、そして幸せに生きていた。その姿を見て、以前彼らに抱いていた「可哀想」という感情は間違いだったと気づくと同時

に、「物を盗まれるかもしれない」と彼らを警戒していた自分をとても恥ずかしく感じた。一方で、「彼らは路上で生活することしか知らないから、今は幸せだと感じるのかもしれない。習い事をしたり旅行をしたりできる世界を知ったら、彼らは自分の生活を幸せと思えるかな？」というJICAの方の言葉が心に残っている。この言葉は、自分の人生において選択肢を持てることがどれほど幸せかを私に教えてくれた。

彼らは厳しい生活環境下でも、自分の夢を持ち希望を持って生きている。そんな彼らのパッションあふれる生き様を目の当たりにして、自分に今足りていないものが何なのかを教わった。

どのような環境下でも、彼らのように強く生きる「草の根」のような人間になりたい。

想いをつなぐ

2023年度 高校生の部 最優秀賞 兼頭 玄



みなさんは途上国支援というどのような印象を持つだろうか。それは、先進国が行う施しではなく、信頼関係の構築だった。私は研修を通して、カギとなる姿勢は「互いを受け入れ、想いをつなぐ」ことだと考えた。

JICAの活動の中に海外協力隊がある。今回はバタガス州で働くお二人を訪問した。農業を支援する三村さんも防災対策を行う川村さんも、現地の人々との

熱意の差という壁にぶつかっていた。それでも、試食会で野菜に興味を持ってもらったり、現地のタガログ語でたくさん話しかけて距離を縮めたりと努力を欠かしていない。多くのフィリピン人にとって大切なのはやはり収入だろう。そのため環境問題への対策や防災は二の次になってしまう。しかしそんな状況を悲観するのではなく、ありのままを受け止めることが大切なのだ気づいた。今できることは、少しずつ信頼関係を築き、次の協力隊員が地域の人と協働しやすい環境を作ること。今は想いが十分に伝わっていないと感じても、数十年後、あるいは数世代先に希望の芽が顔を出す日を信じて。

自分は、国際協力では何か目に見える成果を上げなければならないんだという、目先の視点に囚われていた気がする。お互いにお互いの歩調に合わせ、少しずつ前に進んでいく「草の根」の活動。そこから一人の人間同士の歩み寄りによる国際協力の可能性に気付くことができた。「互いを受け入れ、想いをつなぐ」姿勢を忘れずに、この先歩んでいきたいと思った。

審査員一覽

中学生の部

- 審査員長 **尾木 直樹**
教育評論家・法政大学名誉教授
東京都立図書館名誉館長
- 審査員 **熊谷 恵子**
全日本中学校長会 編集部長
中野区立明和中学校 総括校長
- 審査員 **北野 礼美**
日本航空株式会社 東京支社 顧客販売部
VIP顧客販売室 室長
- 審査員 **中村 絵乃**
特定非営利活動法人 開発教育協会 事務局長
- 審査員 **椎谷 徳子**
JICA 国内事業部 計画・国内連携推進課 企画役

高校生の部

- 審査員長 **星野 知子**
俳優・エッセイスト
- 審査員 **大泉 昌明**
全国国際教育研究協議会 会長
- 審査員 **寺澤 正道**
全日本空輸株式会社 営業センター
法人営業部 部長
- 審査員 **高見 博**
世界銀行 駐日特別代表
- 審査員 **西 健太郎**
株式会社スクールパートナーズ 執行役員
高校生新聞 編集長
- 審査員 **福田 茂樹**
JICA人事部 部長

中学生・高校生の部共通

- 審査員 **日下部 英紀**
外務省 国際協力局 審議官
- 審査員 **川淵 貴代**
JICA 地球ひろば 所長

応募総数

中学生の部
16,526作品 **434**校

高校生の部
19,676作品 **230**校

応募総数
36,202作品 **664**校

入賞者一覽

※最優秀賞、優秀賞、審査員特別賞、
国際協力特別賞はP.01に記載

国内機関長賞

88名

中学生の部

- 三浦 かりん 下川町立下川中学校
木下 桃花 標茶町立標茶中学校
下斗米 穂佳 八戸市立市川中学校
澤崎 わかな 岩手大学教育学部附属中学校
山本 健正 塩竈市立第二中学校
佐々木 飛勇 秋田大学教育文化学部附属中学校
池田 優花 山形大学附属中学校
近内 正英 須賀川市立第二中学校
小橋 結友 茨城大学教育学部附属中学校
藤平 悠輔 栃木県立宇都宮東高等学校附属中学校
小林 咲愛 樹徳中学校
小淵 真歩 春日部共栄中学校
久保田 在春 市川市立第二中学校
栗山 百見 ドルトン東京学園中等部
岡田 美玲 飯田市立高陵中学校
荻原 杏 湘南白百合学園中学校
大竹 花音 山梨大学教育学部附属中学校
順徳 葵子 高岡市立高岡西部中学校
小林 杏 金沢大学附属中学校
内田 隆元 鯖江市東陽中学校
森 胡々菜 土岐市立西陵中学校
三輪 琴音 静岡市立長田南中学校
安井 杏南 豊明市立豊明中学校
小栗 隆誠 滋賀県立守山中学校
田中 美梨 京都市立音羽中学校
岡田 愛彩 学校法人大阪初芝学園初芝立命館中学校
寺田 侑可 松蔭中学校
藤本 悠吾 奈良教育大学附属中学校

- 山本 志乃 和歌山県立古佐田丘中学校
田村 萌梨 鳥取大学附属中学校
足立 理桜 鳥根大学教育学部附属義務教育学校後期課程
小島 陽乃 倉敷市立新田中学校
新谷 紬 府中町立府中中学校
山田 佳奈 徳島県立富岡東中学校
玉木 寧子 三木町立三木中学校
安永 百恵 (学校名非公表希望)
鎮西 璃香 土佐女子中学校
三輪 怜央 プライドキッズガーデン
杠 亮佑 佐賀大学教育学部附属中学校
梶島 嘉斗 諫早市立真城中学校
近藤 紗良 熊本大学教育学部附属中学校
工藤 京志郎 学校法人平松学園向陽中学校
青山 桜咲 宮崎県立都城泉ヶ丘高等学校附属中学校
芳田 希音 学校法人志学館学園志学館中等部
与儀 美菜実 昭和薬科大学附属中学校

高校生の部

- 山下 紗良 北海道北広島高等学校
富岡 綺星 北海道音更高等学校
藤谷 和奏 学校法人大和山学園松風塾高等学校
浅水 公望 岩手県立盛岡南高等学校
根本 心李 宮城県富谷高等学校
松井 結愛 秋田県立横手城南高等学校
鈴木 虹 九里学園高等学校
鈴木 見晃 福島県立郡山高等学校
斎藤 彩葉 霞ヶ浦高等学校
石原 裕也 栃木県立宇都宮白楊高等学校
菊地 翔子 群馬県立中央中等教育学校
小松崎 瑛太 麗澤高等学校

- 佐藤 ひなた 淑徳巣鴨高等学校
山崎 鴻太 長野県須坂高等学校
藤井 華 横浜雙葉高等学校
高野 和輝 学校法人日本航空学園日本航空高等学校
木村 結音 学校法人富山国際学園富山国際大学付属高等学校
西 一樹 独立行政法人国立高等専門学校機構福井工業高等専門学校
北澤 孝太郎 岐阜県立恵那高等学校
曾根 衣咲 静岡県立藤枝東高等学校
堀 有紗 愛知県立千種高等学校
野崎 志津乃 三重県立神戸高等学校
小西 琉偉 学校法人ヴォーリス学園近江兄弟社高等学校
楠本 実玖 学校法人永守学園京都先端科学大学附属高等学校
ブルックス 理沙 関西学院千里国際高等部
水野 駿太郎 独立行政法人国立高等専門学校機構明石工業高等専門学校
榎本 汎杜 和歌山県立田辺高等学校
松村 大輝 鳥根県立飯南高等学校
杉井 心珠 ノートルダム清心学園清心女子高等学校
尾川 颯 広島県立広島観音学園高等学校
武居 莉央 山口県立下関中等教育学校
岩佐 明日花 徳島県立富岡東高等学校
宇都宮 絢 香川誠陵高等学校
宮田 そよ香 愛媛県立松山西中等教育学校
吉田 琳華 高知市立高知商業高等学校
徳森 真凰 独立行政法人国立高等専門学校機構有明工業高等専門学校
中島 更 佐賀県立佐賀商業高等学校
嶋本 有紗 長崎市立長崎商業高等学校
吉野 美咲 熊本県立第二高等学校
安庭 美夢音 大分県立中津南高等学校
井手 駿之介 宮崎県立宮崎南高等学校
福留 亜美 学校法人原田学園鹿児島情報高等学校
新垣 道隆 沖縄県立名護高等学校

佳作

129名

中学生の部

Table listing 129 names and their schools for the Junior High School category. Includes names like 小川 凜子, 永井 巧真, etc.

Table listing 129 names and their schools for the Junior High School category. Includes names like 淨慶 咲, 小谷 優, etc.

Table listing 129 names and their schools for the Junior High School category. Includes names like 松田 郁穂, 白石 怜風, etc.

高校生の部

Table listing 129 names and their schools for the High School category. Includes names like 平野 葵, 藤原 礼心, etc.

Table listing 129 names and their schools for the High School category. Includes names like 山田 穰, 嶋田 達元, etc.

青年海外協力隊OB会会長賞 20名

中学生の部

Table listing 20 names and their schools for the Youth Overseas Cooperation Team Former Members Association President Award - Junior High School category.

高校生の部

Table listing 20 names and their schools for the Youth Overseas Cooperation Team Former Members Association President Award - High School category.

Table listing 20 names and their schools for the Youth Overseas Cooperation Team Former Members Association President Award - High School category.

特別学校賞受賞校 55校

中学生の部

Table listing 55 schools for the Special School Award - Junior High School category. Includes entries for 北海道, 東京都, etc.

Table listing 55 schools for the Special School Award - High School category. Includes entries for 愛知県, 滋賀県, etc.

Table listing 55 schools for the Special School Award - High School category. Includes entries for 広島県, 福岡県, etc.

高校生の部

北海道	学校法人望洋大谷学園北海道大谷蘭高等学校
青森県	学校法人大和山学園松風塾高等学校
宮城県	学校法人尚綱学院尚綱学院高等学校 宮城県仙台東高等学校 宮城県富谷高等学校 聖和学園高等学校
山形県	山形県立鶴岡中央高等学校
福島県	福島県立あさか開成高等学校
栃木県	栃木県立宇都宮北高等学校
千葉県	学校法人鎌形学園東京学館高等学校
東京都	東京都立竹早高等学校

学校賞受賞校

146校

中学生の部

青森県	八戸工業大学第二高等学校附属中学校 十和田市立四和中学校
宮城県	岩沼市立岩沼西中学校
山形県	飯豊町立飯豊中学校 米沢市立第六中学校
福島県	須賀川市立第二中学校 福島市立福島第三中学校 福島市立清水中学校 福島市立平野中学校
栃木県	宇都宮市立豊郷中学校
群馬県	前橋市立第一中学校 吉岡町立吉岡中学校 前橋市立第七中学校
埼玉県	学校法人佐藤栄学園栄東中学校 学校法人佐藤栄学園埼玉栄中学校 上尾市立上尾中学校 さいたま市立大宮国際中等教育学校 三郷市立栄中学校 春日部共栄中学校 武南中学校 北本市立西中学校 蕨市立第二中学校
千葉県	我孫子市立白山中学校 市川市立第二中学校 専修大学松戸中学校
東京都	学校法人創価学園創価中学校 淑徳巣鴨中学校 暁星中学校 世田谷区立瀬田中学校 東大和市立第四中学校 サレジアン国際学園世田谷中学校 葛飾区立青葉中学校 帝京中学校 北豊島中学校
神奈川県	湘南白百合学園中学校 神奈川大学附属中学校
富山県	富山市立南部中学校 高岡市立志貴野中学校
福井県	坂井市立三国中学校 坂井市立丸岡南中学校 鯖江市東陽中学校
長野県	駒ヶ根市立赤穂中学校 松本市立梓川中学校 駒ヶ根市立東中学校 小諸市立小諸東中学校 泰阜村立泰阜中学校
岐阜県	多治見市立笠原中学校 土岐市立西陵中学校

神奈川県	川崎市立橘高等学校
新潟県	新潟青陵高等学校
富山県	富山県立伏木高等学校 学校法人富山国際学園富山国際大学付属高等学校
石川県	学校法人北陸大谷学園小松大谷高等学校
岐阜県	岐阜県立加茂農林高等学校 岐阜県立大垣工業高等学校
静岡県	静岡県立沼津商業高等学校
愛知県	愛知県立千種高等学校
滋賀県	学校法人立命館立命館守山高高等学校 学校法人ヴォーリス学園近江兄弟社高等学校
京都府	学校法人立命館立命館高等学校 学校法人永守学園京都先端科学大学附属高等学校

静岡県	静岡聖光学院中学校
愛知県	愛西市立佐屋中学校 半田市立青山中学校 刈谷市立雁が音中学校 学校法人滝学園滝中学校 豊明市立豊明中学校 名古屋国際中学校
三重県	伊勢市立二見中学校 名張市立桔梗が丘中学校
滋賀県	国立大学法人滋賀大学教育学部附属中学校 大津市立栗津中学校 大津市立堅田中学校 大津市立南郷中学校
京都府	亀岡市立大成中学校 向日市立勝山中学校
大阪府	学校法人四天王寺学園四天王寺中学校 東海大学付属大阪仰星高等学校中等部 学校法人大阪初芝学園初芝立命館中学校 関西大学第一中学校 学校法人創価学園関西創価中学校 吹田市立竹見台中学校 大阪教育大学附属池田中学校
兵庫県	小野市立旭丘中学校
奈良県	生駒市立生駒中学校
和歌山県	和歌山県立古佐田丘中学校
岡山県	倉敷市立新田中学校
広島県	AICJ中学校 東広島市立高美が丘中学校 ノートルダム清心中学校 広島市立祇園東中学校 呉市立白岳中学校
高知県	土佐女子中学校
福岡県	福岡県立育徳館中学校 九州国際大学付属中学校 久留米市立諏訪中学校 飯塚市立穂波東中学校
佐賀県	学校法人佐賀龍谷学園龍谷中学校
熊本県	文徳中学校
鹿児島県	奄美市立金久中学校 志布志市立宇都中学校
沖縄県	昭和薬科大学附属中学校
海外	西大和学園カリフォルニア校 大連日本人学校

高校生の部

北海道	北海道札幌白石高等学校
岩手県	岩手県立金ヶ崎高等学校 学校法人龍澤学園盛岡中央高等学校 岩手県立西和賀高等学校
秋田県	秋田県立横手城南高等学校
茨城県	茨城県立藤代高等学校

京都府	立東宇治高等学校 京都府立北稜高等学校
大阪府	大阪府立豊中高等学校
兵庫県	独立行政法人国立高等専門学校機構明石工業高等専門学校
岡山県	ノートルダム清心学園清心女子高等学校 岡山県立総社南高等学校
愛媛県	愛媛県立松山中央高等学校
高知県	高知市立高知商業高等学校
宮崎県	宮崎県立宮崎西高等学校 宮崎日本大学高等学校 宮崎県立高鍋高等学校
鹿児島県	鹿児島市立鹿児島玉龍高等学校

茨城県	日立第一高等学校 茨城県立水戸第二高等学校 霞ヶ浦高等学校
埼玉県	埼玉県立小川高等学校
千葉県	学校法人千葉武陽学園西武台千葉高等学校
東京都	駒込高等学校 桜丘高等学校 淑徳巣鴨高等学校 成立学園高等学校
神奈川県	横須賀学院高等学校 神奈川県立横浜立野高等学校 横浜共立学園高等学校 学校法人明德学園相洋高等学校 向上高等学校
富山県	富山県立大門高等学校
福井県	独立行政法人国立高等専門学校機構福井工業高等専門学校
岐阜県	多治見西高等学校
静岡県	飛龍高等学校三島スクール
愛知県	学校法人市邨学園名古屋経済大学市邨高等学校 名古屋市立北高等学校 学校法人藤ノ花学園藤ノ花女子高等学校 学校法人平山学園清林館高等学校
大阪府	学校法人創価学園関西創価高等学校 関西大学高等部 香里マヴェール学院高等学校 箕面自由学園高等学校
兵庫県	雲雀丘学園高等学校 学校法人熊見学園神戸星城高等学校 武庫川女子大学附属高等学校
岡山県	岡山県立玉野光南高等学校 岡山県立倉敷中央高等学校
広島県	広島県立広島工業高等学校
香川県	香川県立坂出高等学校
愛媛県	愛媛県立伊予農業高等学校
高知県	清和女子高等学校
福岡県	福岡県立山門高等学校 福岡県立修猷館高等学校 西南学院高等学校
佐賀県	佐賀県立佐賀商業高等学校 佐賀県立致遠館高等学校
長崎県	長崎県立長崎西高等学校 長崎県立島原高等学校
熊本県	熊本市立必由館高等学校
宮崎県	宮崎県立都城工業高等学校 宮崎学園高等学校 宮崎県立都城西高等学校
鹿児島県	鹿児島県立鶴丸高等学校
沖縄県	沖縄県立名護高等学校 昭和薬科大学附属高等学校

国際理解教育／開発教育のための JICAのプログラム案内

全国15か所にJICAの国内拠点があります。国際理解、開発教育のための多様なプログラムがありますので、是非、各リンク先を参照の上、ご利用ください。

地球ひろば訪問

「JICA地球ひろばの目玉展示「地球ナビ」では、SDGsの各ゴールについて学べる。



▲▲▲
地球ひろばの
最新情報

「市民参加による国際協力の拠点」としてオープンしたJICA地球ひろば。

東京をはじめ全国8か所で、映像やクイズによる展示に加え、民族衣装の試着や世界の料理を味わえるレストランなど、“見て・聞いて・さわって”、途上国の暮らしや地球が抱える課題、国際協力の現状を学べる場所となっている。JICA横浜に併設する海外移住資料館では、日本人の海外移住の歴史と日系人の現を学ぶことができる。

教員向け研修

1965年から続く教師海外研修。約10日間の海外研修と渡航前後の国内研修で構成。



▲▲▲
教員向け研修の
最新情報

開発教育に興味・関心のある教員を対象に、途上国を訪問する「教師海外研修」

、それぞれの国内拠点でテーマ別に行われる「国内研修」、指導案の作成・授業実践のレベルアップに取り組む「指導者研修」など、対象者や目的が異なるさまざまな研修を実施している。参加者同士の意見交換や協働作業を通してネットワークを築くことで、研修後も各地域の学校教育関係者と連携してさらなる開発教育の推進を図る。

国際協力出前講座



▲▲▲
国際協力出前講座の
最新情報



講師がアフリカ地域の民族衣装を着て、現地生活・文化を子どもたちに紹介。

海外協力隊の経験者や職員、国際協力専門員など国際協力に携わった

JICA関係者や途上国からの研修員が講師となり、自らの体験をベースに国際理解につながる内容を伝える。講師が直接訪問する「対面型」と、途上国で活動中の隊員などと交流する「オンライン型」の2種類から選択可能。体験談、異文化理解、国際協力キャリア、SDGsなど希望のテーマに沿って講師と講座内容を組み立てる。

12 JICA 関西 (かんさい地球ひろば)★

14 JICA 中国 (ひろしま地球ひろば)★



13 JICA 四国

15 JICA 九州 (きゅうしゅう地球ひろば)★

16 JICA 沖縄 (おきなわ地球ひろば)★



① JICA 北海道 (札幌/ほっかいどう地球ひろば)★

② JICA 北海道 (帯広/おびるっく)★



JICAの国内拠点 (★:体験型施設)



もっと知りたい
JICA国内拠点
国内拠点の最新情報を
JICAのサイトでチェック

開発教育支援教材



開発教育支援教材の
最新情報

冊子教材はダウンロードだけでなく、
無料での貸し出しや提供にも対応。



子どもたちが世
界の現状や課
題について理
解を深めるため

の教材を作成し、無料で提供している。主体的・対話的で深い学びにつながるよう、授業でそのまま活用できるワークや、映像、マンガで学ぶもの、さらにはゲームを取り入れたものまで各種揃える。多文化共生の教材や、教員向けに授業のヒントとなるようなガイド冊子や指導案事例も。すべて地球ひろばのホームページからダウンロードが可能となっている。

国際協力エッセイコンテスト



エッセイコンテストの
最新情報

2023年の表彰式での一枚
審査員との座談会や受賞者同
士のワークショップも行った。



途上国の現状や
日本との関係に
ついて理解を深

め、グローバル社会の中で自分たち一人ひとりがどのように行動すべきかを考えてもらうことを目的として、中学生と高校生を対象に毎年開催。上位入賞者には約1週間の海外研修やフェアトレード商品を贈呈。海外研修では訪問国の文化体験や同年代の生徒との交流、現場が抱える課題とそれらに対するJICAの取り組みを視察することで、国際理解をさらに深める。

言葉にすれば、
世界を動かす力になる。



JICA 国際協力中学生・高校生 エッセイコンテスト 2024

【後援団体】

外務省、文部科学省、世界銀行東京事務所、全日本中学校長会、全国高等学校長協会、
全国国際教育研究協議会、日本私立中学高等学校連合会、
認定特定非営利活動法人開発教育協会、NHK、
各都道府県教育委員会及び政令指定都市教育委員会、各都道府県青年海外協力隊 OB 会

【協賛団体】

日本航空株式会社、全日本空輸株式会社、株式会社スクールパートナーズ

【協力団体】

株式会社日刊県民福井、上毛新聞社